

第三章

社会的な組織

婚姻と家族

多くの Plains インディアン達の習慣は、今われわれがもっているような規律とはおよそかけ離れて、性というものと関係していたが、彼らは、厳格な規律として彼等自身に身につけていた。沢山の文明化された社会のなかには、二つの基準というものがあつた：若い男は、かなりおんな好きであつたようなので、年長たちは、若いおんな達の振る舞いを注意深く監視していた。おんなの貞操が高く重んじられていた；こうした上品な女性だけが、求婚者が沢山の馬を提供するにふさわしいと思われたし、神聖な儀式の際の、まぎれもなく名誉ある仕事というものは、非の打ち所のない純潔の女性によってのみ遂行されたのである。

愛情のようなものが、これらのインディアン達の性生活のなかで、全くなかつたというわけではない。恋人は、女が薪をあつめたり、水汲みの仕事をしていたときには、誘いを掛けたりしていたのであろうし、暗くなると、フラジョレット（木管楽器）などを演奏して、彼女達の気を引こうとしていた。Hidatsa の女達のなかには、彼女の恋人が捕らえられて、彼自身の求めで、彼の友達が襲撃して、彼を捉えているということを聞いた、そのときの感動的な伝統があつた。彼女は、直ぐに、あらゆる危険をものともせず、そこに乗り込み、敵のなかに入ってゆき、かれのところにとどり着き、そして、彼女の義理の兄弟と一緒に、彼もまた彼女に見捨てられた男とともにそこにいるのであるが、そこでかれを救おうと奮闘するのである。

どのインディアンの部族も、近親のものと結婚しない、あるいは、なかには、遠縁の親戚とすらも、さらには、全く関係のない他の家系のものとすら結婚しないという、明確な規則を持っていた。（page 89 参照） また、一方には、現実的な古い習慣もあつた。とりわけ広く普及していた初歩的な考え方は、同姓の兄弟（siblings 男、もしくは、女でも）を社会的には同等の立場のものとして扱っていたし、また、結婚というものを、基本的には、個人的なことよりもずっと、家族通しのつながりであるとみなしていた。さらには、家族の間の繋がりを結び付けているような考え方から、自分の妻が死んだ男は、その妻の姉妹と結婚していたし、夫をなくした女は、その夫の兄弟と結婚をしていた。前者のような習慣は、"sororate"、そして、後者の場合には、"levirate"として、知られていた。こうした結びつきは、何時もと言うわけではなかつたが、こうした結束を固めるということが、よぞまれていたし、これにより、Omaha 族などは、年がかなり上であつたとしても、兄弟の夫をなくした妻と結婚していた。また、そうした同じような部族のなかで、一人の男が、

彼の妻の兄弟の娘と結婚したり、あるいは、彼の妻のお父さんの妹と結婚するなどと言うようなこともあった。

駆け落ちをすることなど、決して稀ではなかったし、多分、それは、もし、その社会が平和そのものであったようなときには、寛容に受け入れられていたかも知れないが、一般的には、たいていの場合、結婚の形式は売買によるものであった。それゆえ、女、そのものが、所有物とならないようなことは、蔑まされていたに違いない。事実、**Mandan** 族のなかで見られたように、実際には売り買いなどというものではなく、二つの家族との間の贈り物の交換として、お互いが相手に対して正確な人数を提供していたようなことも確かである。たとえば、他の例では、明らかに新郎側からの支払い、あるいは、新郎によるサービスの形で、それと対等のもの、つまり、その場合には、彼は、一年、あるいは、二年ほど、雇われ人のような行動をとるのであるが、そのような返礼がされていた。この場合には、彼が、花嫁側の家族(“母方の家”)と一緒に住むというのが、もっとも簡単なやり方であった。**Plains** のインディアン達の場合には、新婚者たちが生活する場所についての、これといった習慣はなかった；**Cheyenne** 族や、**Arapaho** 族の結婚は、一般的には母系社会を中心としたものであったが、**Blackfoot** 族は、これとは逆の習慣(父系社会“中心”)であり、**Crow** 族の場合は、この問題に対しては独自の習慣があったようである。

Pawnee 族の若者は、一時的ではあるが、彼の母方の叔父の妻に近づくことが許されていた、そして、年上の兄弟は、若い弟と、結婚の権利を共有していたようであるが、こうしたことが実際になされていたというのが、この地域全体の風習と言うわけではなかった。一夫多妻(一人の夫が二人、あるいは、それ以上の妻を持つこと)は、一般に許されていたが、しかしながら、一妻多夫(一人の妻が二人、あるいは、それ以上の夫と結婚すること)と言うのは、**Plains** インディアンの習慣にはなかった。こうした戦闘好きの部族では、かなり多くの男達が戦闘で倒れ、こうしたことから、結婚適齢期のおんな達が溢れるという状況を作り出していたのであろう。しかしながら、一夫多妻は、支配者が自分の従者として何百人も従えているというようなアフリカの王様に見られるような、過剰に妻を持っていたというわけではない。力のある **Plains** インディアンは、多分、何人か妻を持っていたのであろうが、四人も、五人も居たというのは稀であり、たいていの場合には、一夫一婦というのが普通であった。それは、決して何人かの妻の中の一人の女のためにそうするということではなかった。実際にあった話として、ある家族の中の一番上の姉と結婚した名士は、その彼女の若い妹達が成熟したときには、彼女達の面倒を見るというような約束をしていた。著名な **Hidatsa** 族の一人、**Small-ankle** は、**Yellow-head** と結婚したが、そのあと、彼女の肉親の若い妹達、三人と結婚し、四番目の少女は、彼女の母により養育されていたので、妹とみなされていたのである。一夫多妻の制度が”姉妹のような”関係に限定されていたというわけではなく、ただ、これが一般的だったというだけのことである；全く例外なく、一夫多妻の家族のなかでは、このような姉妹のほうが、無関係の妻達の場合よりも、女同士の争いが少なかったことが、どの部族でも認められている。二人、ある

いは、それ以上の妻を持つ、その理由のひとつは、名士は、家族のいないときに、一匹の子馬の世話をすることも含めた、供応のための彼の地位に対してそれをする必要があったということである。’私は、もっと妻が必要であった‘と一人の Omaha 族の男が言っていた。”私の一番年上の女房は、あまり体が丈夫でなかったので、一人で彼女の仕事を満足にこなすことができなかったのだ。“と。非友好的な部族から、二番目、三番目の妻を娶るということはほとんどなかった。

結婚について宗教的な拘束はなかったもので、とにかくにも、それは、ごたごたなしに執り行われた。しかし、忠実で、勤勉な女が、見捨てられるようなことはなかった。

男女の間の仕事の分担というのは、一般的には、女たちが農産物の確保をする一方、男は狩猟するという形であった。このことは、半定住型の部族の場合には、彼女は、栽培などの仕事をし、狩猟民族の場合には、野生の食料となる根を掘ったり、野生の実を集めるという仕事を意味していた。どんな部族でも、女が、食事の準備をし、薪や水を持ち運んできて、ティピーの組立てや解体、さらには、布を織い、すべての衣料を作っていたのである。男達は、獲物を屠殺し、栽培する場所を見つけ、村のなかで自分達の住むアースロッジのための、支柱となる木を切りだし、それを運んでくるなどの仕事をしていた。武器とか、石の道具、そして、木を使って物を作る仕事などは、どこでも男の仕事であった。実際、毛皮や、盾、さらには、ティピーに、男達が実物そっくりの絵柄模様をつけていた、その一方、女達は、皮の表面に幾何学模様をつけ、ビーズワークや編み物は彼女達のしなければならぬ仕事であった。

女達の社会的な地位は、しばしば想像されているようなものよりずっと重要なものであった。不倫を働いたような女は、厳格な処罰を受けていたようであり、そして、どこの部族でもそうであったが、ふしだらな浮気の事実なども記録されている。母系社会の住居の場合には、妻の親戚の者達が、冷酷な虐待から彼女を守っていたのであろう。貞節な女は、彼女の夫から、そして、もっと広くは、その社会からも尊敬を甘受していた。ときには、若い人たちの間には、恋愛感情のある思いやりなどもあったので、年老いた夫婦の場合には、もっと深い心から慕い合うようなことあった。女性の立場の制度上の認識が、Crow 族の間では、彼女が夫とともに神聖な儀式の仕事の一部を遂行していたという事実からも伺うことができる。そこには、Melanesian や Australian などの原住民達の間で見られるような、宗教的な儀式生活から女性を組織として分離し、排除するようなことは全くなかった。

インディアン達は、Blackfoot 族に伝わる話にあるような、感動的な、彼等独特の愛情の気持ちを持っていた。敵を様子を探るために送り出された見張りの男が、相手の部族の離れたところに住んでいたある夫婦のティピーを見つける。そこには、丁度、歩き始めたばかりの彼らの赤ん坊が、ヤカンからスープをすすっていた。そして、見知らぬ男が穴から覗いているのを見つけた。すると、ヨチヨチ歩きながら、かれは親に築かれないように、その男に何度も、その食べ物を指す出したのだ。そこを立ち去った見張りは、良心の呵責

に襲われた。自分が見つけたものを報告するのが彼の任務であったのだが、彼は、その子供と両親が殺されるようなことをすることができなかった。彼の気持ちは、哀れみの心が勤めそのものを克服し、彼は、テントに戻り、その両親に、彼らと赤ん坊が無事に逃げるように忠告するのだ。

予想されるかも知れないが、両親は、彼等自身の子供達を非常に愛していたし、また、彼らが死んだときには、本当に悲しい思いをしていた。そんな場合には、一般的には、彼等のなくなった子供によく似た子供達を養子に迎えていた。形式ばった物ではないが、両親が男の子、あるいは、女の子に、男性として、あるいは、女性としての教育をしていた。こうして、彼等は生活のなかで、自らに必要な技術を発揮することができるようになった。教育などというものがなかったわけではないが、それは、最近まで、西洋の社会でしているようなものよりもずっと楽なものであった。時に、それは、両親からされるのではなく、いわば、年長の兄弟からされていた。子供がぶたれたりするのは、極めて稀なことであった；二・三歳のきかん坊は、水をぶつ掛けられたり、あるいは、お化けの話などにより脅されていたが、そんなときには、ふくろうとかコヨーテがお化け役に使われた。子供達をほめるようなときには、Arapaho 族族の子供は、賞賛の言葉をもらったり、あるいは、なにか素晴らしいおやつなどをもらっていた。Crow 族の場合には、子供が最初に鹿を射止めたときとか、あるいは、猟で素晴らしい働きをしたときには、父親の親類のものが賞賛の歌を歌い、彼の手柄を誉めそやしていた。

兄弟が、どんな場合にもどけるだけ助け合うというのは、ずっと昔からのしきたりであった。年上の兄弟は、いつでも自ずと弟達の後ろ盾として存在していた；女の婚約者から提供された馬は、当然のことながら、彼女の兄弟が所有していた；姉妹は、男の兄弟のためにモカシンは、美しい飾り物などを作っていた。こうした、偽りのない愛情というものや、お互いの助け合いの気持ちは、厳しいタブーの妨げとなるものではなかった：少年とかの姉妹が一定の歳に成長すると、彼らはもはや一緒に遊んだり、あるいは、おしゃべりをするようなことはもはやしなくなり、お互いが避けなければならなかったのだ。ほんのわずか2・3年前に、ある、Arapaho 族の 90 歳になる老婆が話していたことであるが、彼女は、兄弟とは一言もないしをしなかったとのことである。どうしても連絡をしなければならぬことがある場合には、目をそらして、そっと伝聞を渡していたようである。このように青年になった男と女がお互いに避けあうというこは、” お互いが尊敬しあうという関係 “ として知られたもののよりどころになっている。社会的には同等であるとみなされていた兄妹姉妹の関係は、今、われわれが考えているようなものより、ずっと拡大されたような関係であった。

われわれ自身の認識に反して、原始部族は、肉親以外の親族に対して、非常に特殊な義務、もしくは、特権を持っていた。たとえば、Arapaho 族の女の父方の叔母は、彼女の姪の教育の任を背負っていた、そして、母方の叔父は、同じような仕事を彼の甥に対して施していたのである。この叔父は、若い女の兄妹のように、彼女の求婚者から馬を受け取

っていたようだし、彼女の結婚を決める権利も持っていた。同じような関係にある **Omaha** 族の叔父の当たる男の場合には、彼の姪の身の振り方について決めるときには、彼女の実際の父親よりも強い発言権を持っていた。**Crow** 族の間では、父親の兄妹、さらには、姉妹は、非常な尊敬ばかりでなく、贈り物を受けるような名誉さえももっており、とりわけ、姪が、収穫に出かけて帰ったきたときには、沢山の食料の根を貰い受けていた。

婚姻関係というものが、法的な一つの血族との新しい一連のつながりを作り出していた。**Plains** インディアン部族は、詳細なところは、部族によってまちまちであったようだが、一人の人間と、彼（もしくは、彼女）の配偶者の親族との間に様々な行為について、明確な取り決めを定めていた。とりわけ、広く行き渡っていた規則は、ある人間と、彼（もしくは彼女）の、義理の両親とがお互いに避けあうという習慣、とりわけ、夫（あるいは、妻）と異性の間でのことである。兄弟（もしくは姉妹）は同等であるという考え方からすると、その中に含まれているある人の兄弟姉妹は、禁止される間柄とみなされていた。**Crow** 族の場合には、かの妻の母親と決して話をするようなことはなかったし；もし、彼が彼女に伝言を持っていかなければならないようなときには、彼女の妻を通して伝えられるというものであった。彼は、誰か他のひとと会話をしている中で、彼女の名前の一部が、**Crow** 族の言葉のなかに発音される恐れがあるような場合には、自分の話している言葉の意味を言い換えるなどして、それが発音されるのを避けてさえいた。うちに感情をこめているというのは、決して敵意ではなく、むしろ、畏敬の念の表れとして解釈されていた。**Arapaho** 族の女は、彼女の夫の父親に対して、話しかけないばかりか、まともに面と向かってみることもなかった；まさしく、つい最近まで、通訳するものは、彼女の義理の父の兄弟について質問することはできなかったし、また、情報の提供者は、彼女の前 15 フィートのところに座っている彼女の法的な子供についての質問に対して答えることを拒絶していた。話をしているどちらも、会話のなかでタブーになっていることを口にしようとすることは、お互いに相手に対して敬意をもっていないものとみなされた。

こうしたことについての考え方が強かったことから考えると、この地域の二・三部族、**Pawnee** 族とか、**Arikara** 族などが、全くタブーを持っていなかったということ、非常に不思議なことである。タブーが実際にあったところでも、義理の父親に戦いの戦利品とか、あるいは、そのほかの物質的な贈り物を提供されることによりまちがいなくそのタブーが抑制されていたということは奇妙なことである。もう一度、**Crow** 族とか、**Blackfoot** 族についていうと、かれらは、男と、彼の義理の母との間のタブーは厳しく保持していたが、それは、**Arapaho** 族の、妻と彼女の義理の父との間についてのタブーとは同じと言うわけではなかった。

Crow 族、あるいは、**Hidatsa** 族の義理の兄弟たちの間には、とても親密な信頼関係が保たれていた。しかしながら、**Crow** 族は、義理の兄弟がいるところでは、男が好き勝手にみだらな話をすることを認めていなかった。このような同性の二人の繋がりの方の慎重な振舞いから考えると、**Crow** 族が、男と、彼の義理の姉妹との間の、考えられないほどの関

係を認めていたということは極めて注目すべきことである；彼等は、和気藹々と仲良く、自由奔放な態度で接し、そして、卑劣な言葉を使ってお互いに話をしていたのである。” **Blackfoot** 族の社会生活 ” という本のなかで、**Wissler** は、**Blackfoot** 族の間では、” こうしたことが、信じられないくらいちょくちょく行われていた。・・・男と彼の妻の間でもこれと同じ様に自由気ままなばかりでなく、お互いに許しあう慣習的な必要性があった。” と報告している。**Arapaho** 族もまた、こうした、お互いに卑猥な言葉でのやり取りや、水を掛け合うなどのいたずらを、姻戚関係にあるもの同士で楽しんでいた。こうした状況で、われわれは、**Plains** インディアン達の結婚と言うものに対する考えが、お互いの伴侶の相手を探すきっかけを作っていたと思い起こすべきである。

THE LIFE CYCLE インディアンの一生

インディアンたちには、結婚とか家族と言うものに関係する非常に沢山の習慣があったので、こうしたことは、個々の人間の存在においては、それぞれ別の成長段階で取り入れられていった。しかし、これらの時期が、そうした地域全体にわたり、画一的に重要視されていたというわけではない。個々の部族、たとえば、**Cree** 族など、にとっては、趣旨一環した時期ごとに取り扱われるのがもっとも適したやり方であったのであろう。そして、どこでも、目だった逸脱の弁解みたいなものが、つけたしされていたのである。

子供を産むときには、**Cree** 族のおんなは膝まづき、そばに付き添う助産婦の一人が、臍の緒を切った。赤ん坊が生まれると、毛皮の毛布に包まれ、そして、森の木につるされた。臍の緒は、その後、子供の来ている服の生地で作った、飾りのついた袋に入れられて、首の脇に保管されていた。幼児は、風呂に入ることはなかったが、乾いた樹皮とか苔できれいに拭かれて、そのあと、数日して、毛布の袋に入れられ、周りに苔が詰め込まれた。ゆりかごのようなものは、こうしたインディアン達には、つい最近になるまで馴染みのあるものではなかった。

子供は、生まれると直ぐに、名前がつけられたが、普通は、お祝いの振る舞いのときに、同性の、超自然の能力をもっている人とみんなからあがめられているひとが、彼の神の子の一生を精霊に祈り、自分の腕にその子供を抱き、その名付け親の靈感のなかに表れた話とか、情景から、名前を取って、みんなに披露し、つけた。また、極めて稀ではあるが、偉大なる戦士が、彼等の偉業の1つにちなんでその子供に名前をつけた。たとえば、赤ん坊の引っ張り出し曾長と呼ばれる男、彼は、かつて、敵を溝から引きずりだしたので、そう呼ばれていたのだが、その男が名前をつけることがあった。また、これは、公的なものではないが、ある男は、彼自身の戦闘での手柄の事実に従って名前を手にもすることもあったようだ。もし、子供が病気になると、別の祈祷しが彼に、新しい名前をつけるように頼まれていた。ときには、ひとりひとりの人間に対して与えられた愛称のようなものが、彼の一生のあいだついてまわっていたのであろう。もし、それが、超自然の体験に基づいて

いるものであれば、彼の名前について誰かに尋ねるようなことは、とても失礼なことだと思われていた；そして、死んだときの名前は、それが、目だって勇敢な死に方でないような場合は、語り継がれることもなかった。Cree 族には、Fine-day、とか、Bear, Fringe, Many-birds, Red-dog, Star-blanket, Upturned-nose, Rattlesnake, Wolf などの名前をよく耳にするが、これらは彼らの典型的な名前である。

看護の期間は、インディアンの場合、白人達の場合よりもずっと長かった；四人のうちの一人の子供は、時に、乳を探さなければならなかったほどだ。またね祖母と過ごす時間も非常に多かった。彼女は自分達の子孫のためめに、部族に伝わるいろいろなことをして見せてあげていたのだ。二人の何の血のつながりのない子供が、時に、思春期の前のころ、友達になると、彼等は、それぞれのお互いの家で暮らすことがあった。そして、二人してそのまま、一緒に戦闘に出かけて行き、同じような憂き目に会い、同じ戦いで戦って、二人とも殺されてしまうというようなこともあったのだろう。

少女達は、思春期になると年寄りの女の保護のもとに小さなティピーの中で、四夜の間隔離された。結婚している女もやはり、生理の間は、神聖なものとされていた結婚していない娘の場合と同様に隔離された。それが、なにか汚れたものになると考えられていたからである。思春期になると、彼女は、木を切り落とし、自分の隔離されたティピーの中で縫い物をし、毛皮の衣装を作らなければならなかった。そして、夜には、彼女の指導役の女の話す物語を聞いた。少しばかりの食事を取り、親切な施しに涙し、そして、そうすることが必要なときには、とがった杖のようなもので、自分の頭を搔いた。この四日の間は、彼女達にとっては、他のときにも経験したのかもしれないが、靈感を感じるのにもっとも重要な時間であった。四日目の夜に、キャンプの女達はその保護している小屋に行った；超能力を操る彼女達のうちの四人が、彼女のために祈りをささげた。そして、彼女が切り倒してきた木切れを積み重ね、それをひっくり返し、その中のいくつかを他の女達がどこかに持っていった。そのあと、彼女は、自分の家に戻され、そこで、さらに祈りをささげる儀式が執り行われた。そのあと、祝いの宴がもたれ、彼女の両親は、呼ばれてきたお客にプレゼントを贈った。こうした儀式は、少年のためには執り行われることがなかった。しかしながら、かれらは、普通、先輩たちから、靈感を如何すれば早く感ずることができるのか聞かされ、そして、それを試していた。（page 157）

人が亡くなると、その死体は、数日間、毎日、そのまま安置され、その後、たいていは5フィートくらいの深さの穴が掘られて、その中に埋葬された。冬には、大地が凍り、穴を掘るのが難しいときには、死体は、丸太の小屋の中に入れて、その上に小枝をかぶせておくか、あるいは、中に包み、そして、大きな木の枝別れしたところに丸太を組んで台を作り、その上に安置された。死んだ人の特別の注文があったときには、丘の頂につくったティピーのなかに、柳の木で作った背宛に寄せ、その死体のまわりには、小さな石の壁のようなものがつくられることもあったようだ。

処理される前に死体は、化粧され、そして、その死んだ人がもっとも大事にしていた衣

装を着せられた；足は、なぜか膝は自由に動いていたので、しばらくの間曲げられていた。腕は胸の上におかれていた。お墓の中には、タバコのつめられてパイプと、獣脂の入れ物が入れた—これらは、彼のもつすべての個人的な持ち物すべての権利を示すものとしていれられた。死体は、良く名の知られた勇士により、ドアのほうではなく、ティピーの隅から外に出されて、悲しみのもとに墓に運ばれていった。一人の戦士が、死体から編まれた髪を切り落とした。極近親のもの達は、彼等の前腕と足に切り込みをいれ、髪を緩やかに編んでいた。そして、名士が時期が来たことを宣告するまで、喪に服していた。死んでから、四日目の晩に、礼式用のパイプと、霊に捧げた食料を使い、祝宴が開かれた。切り落とされた編んだ髪の毛は、その家族のほかの死者の髪の毛の神聖な包みの中に一緒にされた。そうした、包みは、非常に大事に取り扱われ、住居を移動するときには、女達により持ち運ばれていた。そして、その後も、遺族がその墓のそばに来たときには、彼らは、いつでも、そこに、食べものを捧げ、そして、墓をきれいに掃除していた。死んだ人間の個人的な持ち物は、彼らに悲しい思い出が蘇らないように、置き去りにされていた。彼のティピーは捨てられていたし、また、他のものとり替えられるようなこともよくあった；使っていた馬は、残された妻に一匹だけ残し、あとは、息子や娘達に分け与えられていた。

Cree 族の間で普及していた、沢山の習慣が広く行き渡っていた。たとえば、乳離れを遅くすることは、ごくごく自然に為されているものであった；Assiniboin 族の赤ん坊は、二・三歳までは、乳離れをさせられるようなことはなかった。そして、Arapaho 族の子供の場合には、普通、四歳になるまで乳で育てられていた。そして、病気になった子供の名前を変えてしまうなどということも実際に行われていた。不承不承、ある人の名前にまつわる健康状態を尋ねたり、あるいは、死んだ人の健康状態などについて話題にしたりしていた。おそらく、その地域では、仲間という意識が自然であった。とくに、少年達同士の場合にはそれが強かったようだ。つまり、これは、他の遠くはなれた土地の間での男の血の兄弟と言うものができたことを示唆している。Arapaho 族の少女達の場合には、少年達と同じように、思春期の来る前にこうしたつながりをつくり、その関係を一生持ち続けた。

月経の血や、それにより宗教的なものが、接触したり、あるいは近づいたりすることにより汚がされると言う恐れが、この Plains インディアン達の住んでいる地域ばかりでなく、それよりもずっと広い範囲にわたり広まっていた。そして、時には、それにより病気になったり、あるいは、そのことについて、原住民達がたびたび性的な問題を腹藏なく議論したりしていたのである。たった十年前のことでさえ、Arapaho 族の女は、女性問題の研究者 Sister M.I.Hilger にたいして、そのような問題について話すことをとても忌み嫌っていた。” そのようなことを彼らの娘達に教えるようなものはほとんど居なかった・・・もし、生理中の娘さんが病室に入ってゆくようなら、そのことは病人を殺すことを意味していたということをご存知でしょ？” Cree 族の間で考えていたように、彼女たちがある程度の年になるとある期間の間は、何がしかの制限があったようではあるが、それは、ある特定の場所に隔離したり、あるいは、少女のための特別の儀式に閉じ込めるといような

ものではなく、こうしたことが、Plains インディアンの中に広まっていた；たとえば、Blackfoot 族では、Arapaho 族の間で考えられていた、生理についての極度の考え方にもかかわらず、こうしたことにはあまり厳しい考え方を持っていなかった。思春期まえの少年達について言えば、Plains インディアンたちは、儀礼組織のなかに始めて参加することは、家族の重要な出来事であったが、Africa や Australia の原住民達が問題にしている部族の起こりに匹敵するようなものは何も頭のなかになかった。

死体は、通常、使われている出入り口から搬出するものではないという慣習は、いろいろな部族に見られる。Crow 族は、そうしないと、その小屋に住んでいるほかのだけれが、また、直ぐに死ぬようなことになると考えていた。実際にどんな状況であったかと言うことが、Woodland の原住民族（Ojibwa, Menomini, Saukteaux）や、Greenland や Lapps Land ののエスキモー達からの報告書にある。われわれの地域では、火葬により死体が曝されるというようなことは、決してなかったようだが、Cree のやり方のような埋葬や木を墓にするようなことが、Plains インディアン達の典型的な慣わしであった。彼らは、よく、四本の柱でやぐらを作り、その上に死体を乗せていた。そして、死体の骨はばらばらにされたあと、岩の割れ目のなかに安置されていた。この地域でよく行われていたのは、そうした、体が裂かれていくこと、指の切断、その故人の人柄がばらばらになっていくこと、ティピーが見捨てられてゆくことを嘆き、悲しむしきたりであった。どんな風にこの儀式が行われるかと言うのは、その人の裕福さ次第であった。この地域では、故人の人柄の崩れてゆくことは、たいした問題ではなかったが、しかし、Plains インディアン達と同じように、Comanche 族が、馬の大群を手中に納めたときには、非常に沢山のいけにえが捧げられるということに大きな変化があった。Ralph Linton 教授によれば、たった一匹のお気に入りの馬を死者に捧げ、残りの馬は後に居る人々に分けるという折衷的な処理が為されるようになったとのことである。もう一度いうなれば、狩猟民族の場合には、ティピーを捨てるということのほうが、半定住のインディアン達が、死んだ後、アースロッジを去るということよりずっと容易に受け入れられることであった。Hisatsa 族は、そうした、アースロッジを離れることはなかったようだし、多分、それは、そこにある物質的な捧げもののためと思われるが。

Band, Clans, Phratries, Moieties

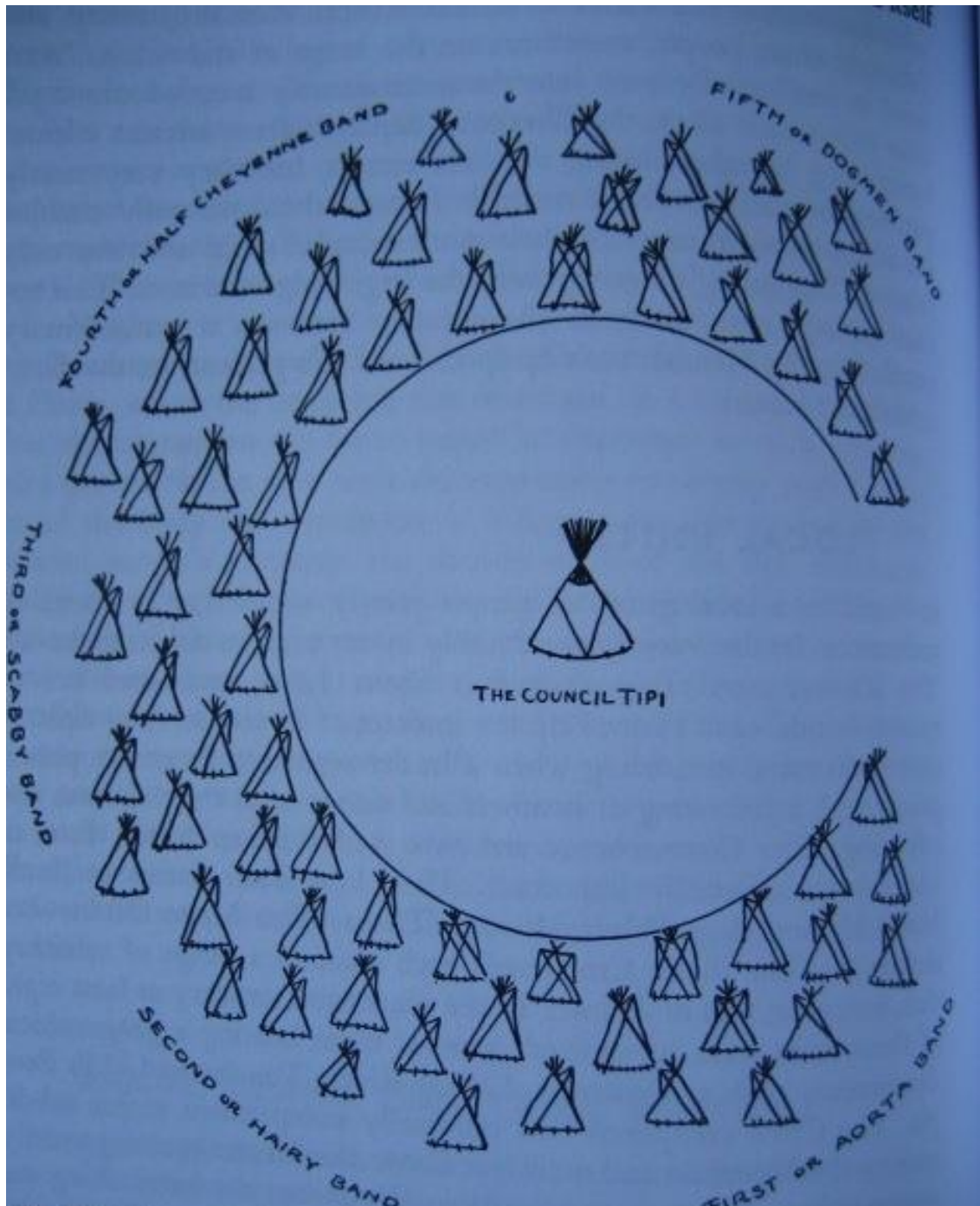
一団、一族、胞族、半族

非常に単純な社会では、家族、あるいは、二・三の家族からなる集まりは、だいたい、極めて局地的なグループ、もしくは、”集団” といった、お互いが血族同士のものであった。この地域の西にいた、Nevada の Shoshoneans たちは、一年のほとんどを彼等の決まった

家で過ごすということが難しかったので、必ずしも一家族よりかなり大きいものと言うわけではなかったが、小さな集団をつくって移動生活をしなければならなかった。彼らは、食料の確保が十分である、ほんの一時の間は、こうした小さな集団が寄り集まって、ダンスをするために大きな集団となることができた。Plains のインディアン達は、より大きな社会というものを組織して生活をするようになっていたが、しかし、冬の間は、厳しい食糧事情のために極めて小さな集団で生活しなければならなかったということを見逃してはならない。D.G. Mandelbaum、彼は、Plains に住む Cree 族の研究者であるが、その彼は、1 月や、二月に、餓死寸前になると、これらの人々は、”小さな集団になって、もっと豊かな森のある地域に移動していった。”と、報告している。1837 年ごろであるが、ある年、Cheyenne 族は、寒い冬の季節に、集団となって彼等の住み慣れた土地を後にしたが、しかし、彼等は、それからずっと、ひどく苦しめられたとのことである。こういうことから、経済的な要因が、Plains に住む部族を、春の始まりから冬の到来にかけての限定された期間ではあるが、より込み入った社会的活動を強いるようになっていた。このことは、おそらく、狩猟をしながら移動生活をしていた部族には、とくに当てはまることであるが、その一方で、Mandan 族のような半定住生活をしていた部族でさえも、冬の寒い時期には、特殊な、あまり贅沢ではない住居に住んでいたのだ。

LOCAL UNITS 極限られた地域の集団

“集団”と言うのは、一緒に獲物を追いながら移動生活をしている極、限られた人々の一団である。その人数も、この地域では成り行き次第で、様々であったようだ。Kiowa 族は、全部合わせても、1,600 人くらいの部族であるが、彼らは、10 から 20 くらいの小さな集団を作っていて、それぞれの集団は、12 から 50 程度のティピーから成り立っていた。この一団には、新しい仲間が、その指導者が自分の兄弟や姉妹を頼って、彼の配偶者や子供達を引き連れて親グループから分かれて加わってきた。Comanche 族には、あるときには、十三の集団に分かれていたが、その四つの集団がとりわけ重要な意味を持っていた。これは、ニックネームのようであるが、彼らは、Burnt Meat, Making Bags While Moving, Those Who Move Often などと言う名前と呼ばれていた。Plain に住んでいた Cree 族の集団は、自分達の領分を主張していたようであるが、しかし、それはいい加減なものであった。19 世紀になり、これらの集団のうちの少なくとも 8 つのぐる一ぷが確認されたが、それらのほとんどが、Upstream, Calling River, Touchwood Hills People といったようにその地形を表すような名前が付けられていた。Crow 族の場合には、政治的に独立した二つの主要な一団、Mountain と River Crow という集団からなっていた。前者のほうは、南部モンタナから、北部ワイオミングにかけて放浪していた一団であり、後者は、イエローストーンの低地地域に住んでいたグループである。Ugly People とか、Red Willow Men などというような名前と呼ばれていた集団が、Arapaho 族の中に加わっており、すべての部族が一団



63. シヤイアン族のキャンプ地 G. A. Dorsey 提供

となったときには、1つのキャンプ地の中で、その中心的な存在となっていた。Cheyenne 族の場合には、11の力を持った小集団がいたようである (Fig. 63); その中の面白いあだ名をあげると、Small Windpipes, Hair Men, Shy People, Eaters などがあつた。

一般的にはこうした集団は、(Crow 族の中でのように)、もっと別の、そして、より固い絆の形で構成されていたけれども、集団そのものは、その性格が何時も変化をしてゆく集まりであった。Plains Cree 族の場合には、1 つの集団から他の集団に自由に移ることができた; Arapaho 族の間では、男は、通常、自分の妻の家族と一緒に住んでいたのもので、子供は、父親の集団の一員というより、母親の集団の一員としてみなされていた。しかし、彼が自分の妻や子供達を引き連れて、自分のもとの集団や、そのほかの集団に加わるのは何の障害もなかった。1 つの集団により甘受されていた独立性の目安というものが、季節ばかりでなく、部族によっても違っていたということもはっきりしている; Crow 族のすべてのものが、ある種の団結心のようなものを持っていたのに対し、River Crow とか、Mountain Crow などは、それぞれ、自律的な考え方をしていたし、Cheyenne 族の集団では、すべてのものが、部族の同じ協議会に従っていた。

半定住の生活をしていた部族の間では、村というのは、力を持った特定の集団が中心になってできていた。政治的に独立していた集団という感覚での部族というのは、Chaui Pawnee 族の場合のように、1 つの村単位での住民のことを意味していたかも知れない; その一方で、Skidi Pawnee は、13 の部落に分かれて住んでいた。Mandan 族の場合には、1833 年には、Nupta(Ruhptate) や Mi'tutak、ここに住んでいた住民は、たしかに方言を話していたし、また、彼らの文化にはほんのわずかの違いがあるだけだったが、というたった二つの村しかなくなっていたが、彼等は、もともとは、同じように沢山の数の村があったといわれている。同じように、Hidatsa 族についても、1837 年の天然痘が大流行をする前の三つの村の少なくとも 1 つは、話す言葉は他の部族から分かれたものであり、また、儀式の特徴に似たようなものを持っていた。

Kinship Unit 血族関係集団

意識感覚が自分達の住んでいる居住の状況によっていた地域的な小さな集団に対し、血族関係で結ばれた集団のそれは、遺伝的なものによって確立されたかなりしっかりしたものだ。このことは、おそらく、家族の一面的なものにこだわらず、そして、周りの人を意識するということによりなりたっていたのであろう。もし、子供達がすべて父親側の一族の一員として数えられているなら、そこでは、父系社会(“patriliny”)の原理が働いており; 逆に、母方の一族と考えられていたら、母系社会(“matriliny”)として扱っている。どちらの性のものもすべて同じ先祖からの子孫であり、男達だけを通した社会、つまり、男系社会体系(“patrilineage”)ができ、このときには、一人の先祖からこうしたすべての子孫が生まれている。これに対して、母親だけを通してできた社会は、母系社会体系(“matrilineage”)と呼ばれていた。実際に、原始的な親族は、自分たちは同じ父方の先祖、あるいは、世代を通して血族関係を追跡することができない母方の先祖から生まれたものであると考えているようなことがしばしば見受けられる。多分、それは、彼等が、その系図を失ってしまったか、あるいは、その相互関係が法的な作り話よりかつて登録されたのか

のどちらかの理由によるものだろう。このような場合には、われわれは、父系、もしくは、母系の血族について話を進める。

従って、血縁関係の集団は、完全に明確な仲間意識と言う点において、普通、単なる集団とはことなっていた。**Arapaho** 族の子供は **Ugly** 集団から、連れ出されて **Red Willow** 集団の仲間に入るときには、養子縁組をしていたが、**Crow** 族の若者の場合には状況が違っていた。もし、彼の **Mountain Crow** 族の両親が、**River Crow** の集団に参加しようと決断し、彼を元の集団に残していくような場合には、彼は、現実問題として、**River Crow** 族の集団の人間であるとみなされたが、しかし、彼は、決して彼の親族との相互関係を変えることはできなかった；一度、**Sore-lip** 族のものとして認知されたら、永遠に **Sore-lip** 族だったのである。

さらにこの血縁関係は、単系集団であるという点でも、家族とはまた違っていた；家族というものが、両親を元にした組織を作っているのに対し、この血縁関係集団は、どちらも一方的にえこひいきしない集団であった。しかしながら、その血縁関係集団が、父方の親族も、あるいは、母方の親族のどちらも認めてはいなかったが、このことが、その全体の人々が、そうであったということを意味しているのではないということに注意を払わなくてはならない。なぜなら、家族と言うものの結びつきが、永遠のものであったので、両親のどちらもが、子供に対して関係を持っているということで立場は明確であった。従って、ここで意味していることは、ある特定の目的のために、ある人の関係は、半分だけが存在していると認められるのであり、他の事についてもものを言うときには、その人の血縁関係集団から出ている半分の血のつながりが極めて重要なのだろうということだ。たとえば、**Omaha** 族の場合には、父系の血縁関係集団をもっており、従って、母方の兄弟は、決して彼の姉妹の娘のいる血縁関係の集団に入ることはなかった；にもかかわらず、彼は、彼の姪が、結婚しようとするときには、必ず相談を受けなければならなかったのである。(Page 82) その一方で、**Crow** 族の血縁関係の集団の場合には、母系のものであったが、；それにもかかわらず、父方の親族は、尊敬されていたし、彼らの兄弟の子供達から贈り物をもらうという立場であった。

一番遠い姻戚関係でさえも、あるいは、ただの表面だけの親戚の間でさえも、男の系列を中心にした血縁関係の集団は、助け合ったり、あるいは、お互いにかばい合うという道徳的な義務意識を持っていた。そして、部族内での殺人事件のような場合には、被害をこうむった血縁は、加害者を、たとえ彼が親戚のものであっても、団体責任の原則に基づいて、処罰することに務めたのであろう。さらにそのほかの血縁関係の集団のもつ一般的な機能は、結婚に関する規制であった：血縁関係集団の中での男達は、血で繋がっているか、もしくは、親戚同士であるとみられていたので、彼らは、自分のこの集団の中のものとして結婚することは許されていなかった。すなわち、この血縁関係集団は、”*exogamous* “（ギリシア語で、*exo* は、外；*gam* は結婚 の意味） だったわけだ。

Plains に住んでいるインディアン達の中で、**Crow** 族、**Hidatsa** 族、そして、**Mandan**

族などは、母系の血縁社会を作っていたといわれている。Oto 族、Missouri 族にもそれと同じようなものがあつたと、Lewis H. Morgan が彼の古代社会協会で報告しているが、われわれの情報では、こうした部族でそれがあつたという情報は断片的なものしかなく、従って、全体にわたってそのような社会ができていたとは思われない。ある権威のある人は、Cheyenne 族は、昔は、母系の血縁関係集団をつくっていたが、それが、つい最近の社会体系の中に引き継がれていたと信じていたようだが、別の観察者は彼の意見に反対している。Pawnee 族は、人々は生涯彼の母方のほうの村に属していたという感覚から、疑いなく、母系の血縁社会であつた；そして、女は決して、自分の生まれた集団から決して離れることがなかったので、彼女は、彼女の母や、母の姉妹、娘、そして、その娘の娘達とともに、母系の血縁社会の永久的な中枢メンバーとなっていた。しかしながら、Pawnee 族の村の場合は、それは必ずしも血縁社会というものではなかつた；許可が得られたなら、男は、結婚して別の村に行くこともあつたかもしれないが、しかし、これは、非常にまれな出来事で、村全体が部族外と結婚しなければならないという社会ではなかつたということではなく、部族内結婚、つまり、”endogamous” だつたというわけである。

Omaha 族、Ponca 族、Iowa 族、Kansa 族、そして、Osage 族などは、父方の血縁社会を持っていた。Blackfoot 族や Gros Ventre 族についてみると、権威ある人たちのある一部の人たちに不賛成の意見がある。その結論は、個人と彼の部族のある一部の人たちとの結びつきの永続性次第ということになっている。Wissler の根拠、これは、American Museum of Natural History の論文のなかで報告されているものであるが、それが、Blackfoot は、彼の属するグループを選択するのは自由であつた。そして、その中での結婚は、“血の繋がりが濃いような関係が見逃されていたのではないか” という簡単な理由であまり良いように思われていなかった；そんなこともあり、彼は、Blackfoot 族の集団のことについてよく話をしていた。しかしながら、Wissler の根拠に基づけば、一般的な感覚としては、子供は、彼の父親の側の集団の一員とみなされていたし、また、移住して来たものは、そのもともと属していた集団の仲間意識がたびたび表に出ていたので、彼らはどちらとも取れるようなケースを表していると言わざるを得ない。Dakota 族や Assiniboin 族については、これもまた、疑う余地のないところである。1767 年に、東部 Dakota 族を訪問した者が、まちがいなく、ほかの Woodland 部族に由来するような名前のついた血縁集団の一団が居たことを報告している。というわけで、確かと言うわけではないが、多分、一団というのは、血縁関係集団のことを意味しているのであろう。

南の Siouan 族の血縁関係集団は、一般に、幾つものグループに分かれていた；こうした小さなグループは、“準血縁関係集団” と呼ばれていたのだろう。その小さなグループの名前は、もとの血縁関係集団に応じていろいろ変わっていた；Iowa Elk の血縁関係集団の場合には、Big Elk, White Elk あるいは、Bull Elk などといった準血縁関係集団があつた。

時には、1 つの部族の中に、二つとか、あるいは、それ以上の血縁関係集団が存在し、彼らは、その場合には、その集団同士はお互いに、そのほかの集団よりも、もっと深い関係

があると思っていた。そうした集団は、“フラトリア(胞族)”と呼ばれていた。**Kansa** 族の場合には、七つのもっと大きな集団があったが、彼等はそれを“一緒に歌を歌う仲間たち”と呼んでいた；その中の三つのグループは、二つの血縁関係集団からできており、三つのグループは、三つの血縁関係集団からできていた。16世紀の血縁関係集団というのは、そのフラトリアと同等であったと考えられたが、これは、多分、そのグループが以前は他の血縁関係集団と何らかの関係があったが、その血縁関係集団が消滅してしまったからであろう。しばしばこのフラトリアと言うのは、ただ単なる友好的な血縁関係集団同士と言うだけで、それ以上の重要な意味合いはなかった。彼らは、特別な名前もなかったし(**Crow** 族など)、また、**Fire** とか **Earth** (**Ponca** 族)のような呼ばれ方をしているだけだった。

それよりももっと重要であるのは、部族全体が、二つのお互いに助け合うようなグループ、あるいは、“**moieties**”(フランス語で、**moitik** は、半分と言う意味)に分かれていたという二元構造である。こうした、分割された半部族は、もし、外部結婚組織であるときには、お互いが主流血縁関係集団であると思われていた；しかし、彼らの祖先というのは、歴史的には、多重血縁関係集団システムから出てくるものとは違っている可能性がある。北部のアメリカインディアン達の間で、われわれは、分割されていない **moiety** と二つの血縁関係集団に分かれていた **moiety** を見付け出している。後者の場合には、その **moiety** は、やはり結婚というものを規制していたようであるが、それは、必然的にその血縁関係集団を外部との結婚習慣を持つものにしていた；あるいは、結婚について何も規制していなかったか、；あるいは、その **moiety** のなかで、効果的な厳しい制約なしに部族内での結婚というものを仕方なく認めていたのかもしれない。こうした可能性のうちで、最後のものが、**Omaha** 族のなかにあったことが実際に確認されている。われわれは、ある理由からそれらの **moieties** が、以前は外部結婚の慣習があったと考えている。**Pawnee** 族の場合には、彼等は、この血縁関係集団という組織を持っておらず、また、外部との結婚習慣の部族であったが、かれらはそれにもかかわらずこの二つのグループに分かれるということに強い執着を持っていた。かれらは重要な狩を祈るとき、あるいは、宗教的儀式を執り行うために着席するときには、何時も、**Winter** と呼ばれる人々は、車座の北半分の席に着き、**Summer** と呼ばれる人々は、南の半分の席についていた。仲間の資格は世襲制で、すべての個人は、永久に母方の **moiety** に属していた。南部 **Siouans** 族も、三月にキャンプをするときとか、あるいは、狩で移動するようなどときには、広い空間という意識のなかで、**moieties** というものが、相互補助の意味合いを持っていたことを示していた。**Omaha** 族の場合には、1つの **moiety** は、空と関係していたし、；あるものは、大地と関係していたし、；**Osage** の半部族は、平和とか闘争などという意味のものがあった。こうした、**moiety** と反対の意味合いの概念との結びつきというものが、ブラジルや、オーストラリアなども含め、世界の様々なところでも見られているのである。それは、**moiety** はお互いに奉仕させるものであるという広く行き渡った特徴でもある。**Osage** 族の子供が病気になったときには、その親

は、他の moiety の人たちに食べものをお願いしていた。

明らかに、Mandan 族や、Hidatsa 族の moiety は、南部 Siouans 族のそれよりも、際立った現象を示すものではなかった。三つ血縁集団とか、四つの血縁集団と呼ばれるものは、それぞれ、その数の血縁関係の集団からできていた。彼らは、結婚を規制して射なかったし、主として、協約のような政治的な事柄が問題になっているときにはっきりとした機能を果たしていた。かつては、それぞれの集団が、独自のワシの狩場を持っていた。

血族集団とか、胞族集団とか、そして、moieties などは、いろいろな組み合わせからできていた。Pawnee 族は、血縁関係と関係のない moieties を作っていた；Crow 族は、moieties をもっていなかったが、六つの胞族集団のなかに、13 の血縁関係集団があった。二つずつ組になった五つの血縁集団と、三つが一緒になってものであった；Omaha 族の場合には、それぞれの moieties は、さらに幾つかの準血縁集団に細かく分かれる五つの血縁集団からなっていた。Ponka 族の moieties は、四つの血縁関係集団があり、二つずつが一緒になり胞族集団を作っていた；Kansa 族の胞族集団の作り方は、moiety の部分を交差させてした。こうして、Earth と Elk という血縁関係集団は、正反対のお互いだったけれども 1 つの胞族を形成していた。

こうした、血縁関係集団の呼び方は、様々な歴史的な重要性を呈している。Crow 族の血縁関係集団は Treacherous とか、Filth-eaters とか Sore-lip, Greasy-inside-their-mouths などというように、かなり一様性があつた。名前の付け方のこうしたやり方は、Blackfoot や Gros Ventre 族、かれらは、Ugly-ones、とか、Those -who-do-not-give-away とか Fighting-alone, Fish-eaters, Liars, Badguns などといった名前があつたが、こうした、不確実な部族の準集団などにも適用されていた。明らかに、Arapaho 族や Cheyenne 族の一団の名前をつけるのに使われた同じようなものが、ここでも引用されていたのだ。Dakota 族の似たような現象は、似たような決まりとして、明示されていた。利口な Wears-a-dogskin-round-the-neck とか、Breakers-of-the-law とか Not-encumbered-with-much-baggage というようにである。簡単にいうと、西部の Plains のなかの広い領域で、ニックネームをつけるということが常識的なやり方だったのだ。

このシステムと際立った対照をしていたのが、南部 Siouans のそれだった。ここでは、名前の付け方は、動物の世界とか、ある種の宇宙の現象とか、技術的な言葉である、阿智部の部族の“崇拝の対象”中にある部分とか、あるいは、自然の特徴などからきていた。血縁関係集団の名前が、実際に Omaha 族の中にいた動物にちなんで付けられたものでなくても、それは、何らかの方法において、その種類とか自然の現象と関係していると思われていた。Omaha 族は、Elk, Black, [Buffalo] Shoulder, Wind, Deer などの血縁関係集団があつた；そして、名前とは似つかない性格のものであつたとしても、その言い伝えをする人たちは、崇拝の対象となるものと結び付けられていた。こうして、アースロッジを作る人たちは、Wolf や Coyote の人たちとはっきりとされていたし、灰色の目をした人たちは、Thunder とか、Reptile の人たちといわれた。準血縁関係集団の名前は、多分、メン

バーの人たちが信じていた、タブーなどを表していた。たとえば、**Do-not-touch-buffalo-heads** とか、**Do-not-eat-buffalo-tongues** といった具合である。**Crow** 族の場合には、そういった血縁集団の名前の付けかたを暗示しているようなものは見当たらない；そして、**Prairie-chicken** などと言う名前は、**Mandan** 族とか、**Hidatsa** 族の場合には極ありふれたものであった。そして、**Mandan** 族では **Eagel** という血縁関係集団があったが、こうした名前の付け方に関して、深い意味があったというような根拠はなにもない。

さらに、良く知られた南部スー族の血縁関係集団は、それぞれ生まれた順番に一連の名前が付けられていた。オマハ・エルク族の一番上の兄弟は、ソフトーホーンと呼ばれ、二番目は、イエローホーン、三番目は、枝ーホーン、四番目は、第四ーホーンといった具合であった。しかし、こうした習慣は、スー族のほかの三つの母系血縁関係集団の間には、その痕跡もなかった。

名前とは離れて、南部スー族のシステムは、北の部族には見られない違った形態を持っていた。つまり、それは特別な血縁関係集団だけに限られた独特な儀式と統制的な機能であった。オマハ族の間では、ブラック[バッファロー]ショルダーと言う部族が、平和のパイプを所持していた。彼らは、バッファロー血縁関係集団の一つで、二つの神聖なテントを管理していた。そして、ディアーヘッドという血縁関係集団の分派のパイプと言う集団だけが、彼らに密着して統制する特権を持っていた。オサゲ族の統治者羽何時も、特別の集団から選抜されていた。

こうしたことについての注目すべき点は、平原に住んでいたインディアン達のなかの南部スー族は、北のほうのスー族のこの血縁関係集団の持っていた形態と明らかに違い、それは、ウィスコンシン辺りに住んでいたアルゴキン系のメノミニ族やスー・ウィネバゴ族などを含む父系社会のウッドランドの人々の形態を、即、思いださせるようなものであった。メノミニの集団は、すべて、動物の名前をつけたもので、かなり沢山のものが南部スー族の一派が持っている名前と一致していた、たとえば、熊、狼、ワシ、ビーバー、エルクといった具合である；こうした集団は、ここの人の名前にも独特なものであり、また子供達も名前は生まれた順番が判るように付けられていた；そし、社会を統治する機能は、熊部族に属していたのである。さらに、オマハ族や彼に最も近い血縁の深い部族ほど、明確ではなかったけれども、メノミニ族は半族を連想させるような二重の集団構造を認めていた。：ラクロスというゲームをするときには、鳥のトーテムポールをもった集団は、何時も決まって、動物のトーテムポールをもった集団と戦っていた。これは、容易に想像つくように、こうした感覚は、スー族・ウィネバゴのものに近いものであった：ここで、トーテムポールの名前の付け方や、それぞれの血縁関係集団につけられたもとの名前、そして、その集団がもっている特別な機能、特別の集団だけが持っている統治の権力や儀式の特権などばかりでなく、系列化した半族もまた、天空とか大地と深い関係を持っていた。そして、旧い村の中では、こうしてそれぞれに分かれた人たちの住まいは、仮に描かれた

北西部と南東部という境界線により分かれていたといわれている。

端的に言うと、もし、われわれが社会的な構造に基づいてのみ文化的な領域を色分けするなら、伝統的に平原地域と言うのは、南部スー族とずっと西の方に広がったウッドランドの部族とを一緒にしたような地域に分割されるはずであろう。南部スー族というのが、東のほうから来たということを考えれば、何が起こったのかといえ、それは単に、彼らが東のほうに住んでいた血縁関係集団の様式を、彼らが現在住んでいる地域に持ち込んだということにすぎない。と同時に、歴史的な平原地域と言うのは、この点で、特殊な多様性と言うものを提供しているのである：母系社会と父系社会の家系、トーテムポールを信望しない集団と、トーテムポールを持つ集団のシステム、部族的な準派の類似性はあるが、しかし、血縁集団のシステムを完全に取り込んでいないもの、そして、全く拘束力のない血族組織など、こうしたものはすべてが、ロッキー山脈とミシシッピ川の上に挟まれた地域に芽生えたものである。

Kinship Terms 同族関係について

この関係の中では、他の事実が非常に重要な意味をもっている。最も原始的な部族は、血の津ながらと、今の私達とのものとはちょっと違う結婚と言うものによって、その関係を明示している。彼らは、われわれが知らない識別法をもっており、一方、われわれが、この上なく重要な違いと認識しているものを区別することができない。このように、平原に住むインディアン達の部族のほとんどが、年上とか年下の兄弟、あるいは、年上・年下の姉妹というものに対して別の言葉を持っている。しかし、彼らのほとんどは、父方の叔父については、母方の叔父とは細心の注意をして区別しているのにもかかわらず、父親とか父親の兄弟に対しては、一つの言葉で呼んでいる。こうしたことに対応して、母の姉妹は、一般的に“お母さん”と呼んでいるのに対し、本当の母親と母方の叔母は、父方の叔母とはっきりと区別しているのである。原住民達は、普通、こうした言葉を使うことに非常に論理的なのである。彼らは、また、兄弟とか、姉妹が非常に沢山居ることを認識している：同じ個々のひとを“父”あるいは“母”と呼ぶ人たちを、ごく自然に、男女の区別なくお互いにきょうだいとみなしているのである。

さて、この現象には別々の興味深いものがある。その一つは、社会的な規律に関するものであり、もう一つは、歴史的な考察によるものである。社会学的には、家系についての規則がその相互関係のシステムをうまく取り入れているような思われる。個々の独立した家族と、地域集団とが、唯一の基本的な社会的一団を構成しているところでは、われわれと同じように、人々は、父方の叔父と母方の叔母とを区別しなければならないようである。しかし、家系の片方側から見た規則が普及しているところでは、上述したような分類分けを取り入れている傾向がある。それは、相互関係が、彼らの父親、ないしは、母親の側から来ている血統であるのかどうかに関係しているものと考えられていることを意味している；と言うことであれば、父方と母方の叔父は、同じ名前と呼ばれることはありえな

いのである。しかし、父親と父方の叔父は、その可能性がある。と言うのは、注目しているのは、個々の人間の生理的な関係ではなく、この家系の流れに対してであるからだ。従って、われわれは、ダコタ族、彼らの東の地区に住んでいる分派は、多分、父方の系統を持っているものであるが、彼らの間では、1人の人間は、沢山の父親と母親を持っているのである。そけは、父親側の叔父に加えて、すべての彼のいとこが、同じ血縁関係集団の中では、父親と定められている“父親”として数えられているからだろう。そして、これと同じようなことが、母方の姉妹や女のいとこについても同じようなことがいえるのである。

平原に住んでいるある部族は、世代の違いさえも無視するために、もっと強く、父方、もしくは、母方ということに固執している。こうして、クロー族とかヒダツサ族の言葉の中には、われわれが“父”として訳している言葉が、ただ単なる、“子供の親”とか、“子供の親の兄弟”、さらには、“子供の親の世代の血縁関係集団の中の男”という意味だけでなく、“父親の姉妹の息子”と言うような意味も持っている。このことは、極めて論理的でもある。それは、もし、1人クロー族のものが、ただれた唇をした集団に属するものであるなら、彼の姉妹は、似たような取り扱いをされているからである。そして、母方の家系により、彼女の子供達は、同じ立場でなければならないのである。こうして、あるいとこが居るとしよう。彼らは、母方の兄弟の息子なのであるが、彼は相手、彼の父の姉妹の息子を“父”と言うように呼んでおり、それとは逆の場合は、論理的にも、“息子”と呼んでいたのである。

父系社会のオマハ族やそのほかの南部のスー族の間には、逆ではあるが、これと同じ考えがあった。ここでは、ある1人の少年が、母方の兄弟の息子のことを、彼の母方の叔父に対して呼ぶのと同じ酔うな言葉で呼んでいた。一方、母方の兄弟の娘は、父系社会では、こうした関係を一まとめにしていたので、“母”と呼ばれていた。

明らかに、ダコタ族やクロー族、そして、オマハ族の組織では、彼らのいことというものの取り扱いが、互いに明らかに違っていた。この見方における第四番目の可能性は、アラパホ族や、グロス・ベントレ族、そして、サルシ族のことを見ればはっきりする。彼らは、どのようなところでも、兄弟姉妹の間にも何の区別をしなかったのだ。ここでとりわけ興味のあるのは、この三つの部族のどこも、血縁関係集団の組織を持っていなかったということである。

歴史的に注目すべき事項は、南部のスー族が、西部のウッドランドの人たちの系列のなかに一度取り込まれていたということである。彼らはシステムは、見た目もウィネバゴのものと同じであり、ソーク族はフォックス族と、メノミニ族はキッカポー族と同じである。別の言葉で表現するなら、見た目の類似性が、言葉の同類系統の境界を寸断しているのである。幾つかのスーの部族は、他の自分達仲間のスー族よりも、むしろアルゴキン語族にずっと近い言葉を話しているのである。社会的な組織構造と、それと調和の取れている血縁関係の名前のつけ方が、間違いなく、言葉の類縁性にかかわらず、この合衆国の中央地

域に居住する相当数の多い部族を混乱させていたのである。アルゴキン語族なのか、スー族なのかと言うことは、問題の形がどちらの民族においても一般的ではないので、それを語ることは不可能なのだが、それは、そもそもかれらの元祖の問題だったのだ。

CLUBS AND SOCIETIES 集団と社会

自分自身の家族とか、一族、そして、血縁関係集団とのその人の社会的なつながりから離れると、その人は、ほとんどの平原に住む部族のなかで、仲間という意識が血縁関係を当てにしない組織と結び付けられていた。こうしたつながりと言うのは、まことに様々な目的のために貢献していた。そして、性格的には、こうした基本的には宗教的なものは別の指導者の下では、一番良く認識されていた(172 ページ参照)。しかしながら、宗教と祈祷は生涯のあらゆる場面でお互いに干渉し合っていたので、主として現世の組織は、稀に、超自然的な力の色彩を欠いていた。そして、同じ部族の中の、および、明らかにお互いに何らかの関係があるような組織同士の集まりでは、特定の社会が他のものより、ずっと宗教的なにおいがするというようなことが起こった。寒い季節が到来すると、小さなグループに対して部族が援助をしたりするので、つながりと言う意識の行動が、正常な組織の再編成が行われる春先まで大部分は延長されていた。

社会というものは、女性系より、男性系らしくないもののほうが、極当たり前であったが、しかし、オーストラリアやマレーシアのような場合を除いて、人生のこうした面ばかりでなく、そのほかの面も女性中心であることが非常にはっきりしていた。現実には、女性の補助団体のようなものが戦闘集団のなかでさえ、歴然と存在していた。さらに、ミズーリ川の上流に村を形成していた部族は、とりわけ重要な女たちの組織を持っていた(194 ページ) そして、ポウニー族は、けばけばしい擦り切れた衣装をまとい、そして、戦争で捕虜にしたものを苦しめるような、独り者の女性と後家の女たちの奇抜な組織を持っていた。カイオア族の間では、狩りに出かける男は、彼が、戻ってきたときに獲物に感謝して宴をひらいて楽しむ、せいぜい40人くらいの年取った女性の体に見えるような格好をした。ティピーの覆いを被せる巧妙な技術を伝える組織や、熟練した糸巻きの仕事の伝える組織などが、オガラーラのダコタ族の間に知られている。

しかしながら、全体には、男たちの集団組織が、疑いなく、より大きく厳然と存在していた。そして、そうした集団のなかに、犬の兵士たち、あるいは、さもないれば、軍隊とか、警察、あるいは、年配たちの組織などという形で知られているような部類の組織が傑出している。ただ、ごくわずかの部族が彼らの組織を年によりランク分けし、そして、どこでも、その機能は多岐にわたる傾向にあったので、こうした組織の任命の仕方とどれも適当なものとは思われない。こうした社会の比較研究をしているなかで、博物館が特化したので、彼らのあらわし方は、それを説明するということでは、非常によくあらわしている。とりわけ、アラパホ、ヒダツサ、間ンダン、ブラックフット、そして、クロー族のも

のは、そうしたことが言える。

もともとインディアンたちは、年で彼らの年齢を数えるというようなことはしなかったが、五つの部族——マンダン、ビダツサ、ブラックフット、アラパホ、そして、クロス族——は年社会というシステムを持っていたことが知られている。これは、多分、二つの理由によるものであろう：いずれにしても、必然的に、同じ年の若者たちは、彼らの年長者たちの行動を真似るようになるということ；そして、こうしたことのなかで、通常は、ほかの類の特権と結びついたものであるが、衣服とか、踊り、歌など、確たるものを身につける権利を買い入れるのだ。買う側は、仲間として売る側の方に加わることはしなかったが、とって代わることはあった。しかしながら、売る仲間たちは、年長者たちの集団が持っているそれに相当する名誉と特権を共同で購入した確固たる仲間として依然として残った；そして、この家庭は、ある一定の間隔で、少年たちの最初のグループがさらに上部の組織となるまで、何回も繰り返された。彼らが、それを他人に売ってしまったときには、彼らは、一緒に、その組織の体系から引退をした。実際に、厳密な意味でなければ、五つの部族のすべての男たちはそのシステムのなかに入っていたし、また、年をとるまで、その組織とともに残っていた。彼らの年長者をからかうような若者たちの最初のいたずら集団は、年が来ても大きく変化をすることができなかったのもので、そして、また、彼らはいつも体のなかに新しい仲間意識を持ち込んでいたので、この一連のなかでずっと仲間同士は、大体、同じ年頃の連中ばかりの集団を作っていた。

こうした、購買のやり方は、風変わりな形を持っていた。少なくとも、ヒダツサ族やマンダン族のあいだでは、より年の若いグループは、いつも前に進もうとして、次の注文者のことを気にしていた。それは、彼らに“父”と呼ばれていた人で、彼らに最も愛された踊りや、バッジ、そして、関係したような振る舞いのやり方をしゅしゅあきらめるような振りをして、彼らに一番有利になるようにしてくれたのである。それゆえに、期待される買い手のものたちは、沢山のみやげ物を持って、売り手のものたちの小屋にやってきて、そして、彼らに、売ること同意するような意思の表わすときにだけ受けとるパイプを差し出した。すると、年長のものは、この最初の支払いが十分でないこと、まず、言い表す；そこで、買い手のものは、とっさに彼の親戚のもののところに行き、もっと沢山の支払いをするものを借りてくるのだ。年寄りの者たちは、それでもなお、あたかも、彼らの年下のものたちに、あたかも恩を着せるようなそぶりをする。しかし、結局は、買い手のものに彼らの“父”に、それから、四日か五日くらい毎晩ご馳走をもてなすように注文して、そのパイプを受け取り、タバコを吸うのである。そして、親族一同が、その買い手のものたちが、より地位の高いグループの者たちを満足させるだけの食料が集められるように手助けをするのだ；こうして、約束された晩に、売り手のものたちは、彼らのご馳走を堪能し、買い手の者たちに、問題になっているその社会に特有な歌とか踊りを教え始めていた。買い手たちは、こうした場合には、ある程度まで、その歌とか踊りに参加していたのであろう。その小屋の持ち主は、“息子”たちに彼ら受けることになる名誉に対して、

存分に気前良く振舞うように。そして、戦士として目だった沢山の“父”の例を見習うように、熱心に促したのであろう。こうして、見本を指導をする最後の晩が終わると、階級を示すバッジが、新しいメンバーに対して引き渡され、そして、彼らがその時以来、新しく加わった階級の代表であるという事実を知らせるために、彼らにより、公の行列と踊りが、執り行われた。

1837年に起こった天然痘の大流行と、そのほかの災いのために、従来の方法で、この伝統を保つことができなくなったが、しかし、その消失が本当の根拠を明らかにした。1910年に、ヒダツサ族の90歳になる老人が、彼は、彼のメンバー資格を売るチャンスが一度もなかったので、今もなお、20歳、27歳、そして、45歳のときに加入した社会グループのメンバーであるということを明らかにした。ほかの言い方をするなら、原住民たちにとっては、どのような組織の会員資格も、購入により手にする所有権を意味してはいなかった。一多の先住民共同体の中では、どこでも、結婚するためのような、ある特定の年齢とか、地位というものではなかった。このような結論を支持するような別の事実がある。これらの五つの部族のなかにはどこでも、それぞれ、**Kit-foxes**とか、**Dogs**などと呼ばれていた、年齢により構成されていたこうした集団があったが、それらは、ほかの部族の中の同名のものと間違える場合があるので、そんなときには、必ず、それらのすべてに対して、予備的な単数の**Kit-fox**ないし**Dog**という名前をつけていた。(Fig. 30から32と64)しかしながら、両方の社会的な地位というのは、異なる部族のなかでは、明らかに違っていた。マンダン族の**Kit-foxes**というグループは、未婚の男たちだけから構成されていたもので、8歳の二ヶ月目から10歳の子供たちであった；1833年には、ヒダツサ族の似たようなグループが、10個の一連のグループの中の四番目に位置されていた；アラパオは、その名前は、まだ、こうした順番のついた序列の中の物ではなく、予備的な序列の少年グループのものとされていた；しかし、長いあいだ消滅していた**Piegán**と同一の名前が、非常に序列の高いところにあり、そして、神聖な機能を持つものと信頼されていた。ブラックフートのものつすべてのリストの中で、**Kit-foxes**は**Dogs**よりも序列が上であった；今では、どこでも、**Dogs**は、明らかに高い地位のグループであるけれども。アラパオ族のあいだでは、このグループのメンバーの平均年齢は、**Kit-foxes**の18、あるいは、時には、12歳というものもあったが、これにたいして、50歳くらいであった；マンダン族の持っているリストの中に、**Kit-foxes**が二番目のグループであるのに、**Dogs**は、7番目の買い手の序列というものがあつた；ヒダツサ族のなかでの相当する序列は、1833年にはそれぞれ、6番目と4番目であった。その後の情報では、7番目と4番目、あるいは、9番目と2番目というものさえあつた。いうなれば、同じ社会は、基本的には、特別な年齢とか結婚の身分などには関係なく、別の部族では序列も異なっていたし、実際、同じ部族の中でも、時代が変われば、この序列は違ったのである。もし、新しい社会、たとえば、新しい特典の連合体、が作られたり、あるいは外部から導入されたのなら、それは、新しく取り入れられた部族により、そこにある体系のなかに自然に組み込まれていった。このことが、その後、そこに作られ



64. 犬集団の踊り手 Hidatsa. Carl Bodmer マクシミランの版画より

る序列を自動的に変えていった。しかし、どこでも、それにより、その社会の所有する内容に影響が及ぶというものではなかった。

一つの部族のなかで、19 世紀の間に見られた構図の変化は、マクシミランのヒダツサのリストと、1910 年に、ある年寄りの情報提供者が彼の若い時代に修正されたものとして教えてくれたものとの比較から見ることができる。

マクシミラン	バタフライ
1. Stone Hammers	1. Stone Hammers
2. Lumpwoods	2. Kit-foxes
3. Hereroka (Crow Indians)	3. Lumpwoods
4. Kit-foxes	4. Little Dogs
5. Little Dogs	5. Half-shaved Heads
6. Dogs	6. Enemies (Black Mouths)
7. Half-shaved Heads	7. Crazy Dogs
8. Enemies (Black Mouths)Bulls	8. Ravens
9. Bulls	9. Dogs
10. Ravens	10. Bulls

この過程、いうなれば、30 年とか 40 年ごとに、何回か、これと分かるような変更が為されており、これによりその組織の地位と言うものを変えることができたのである。これは、もしその組織が他のグループに対して自分達の所持している権利を売り渡すようなときには、われわれが、その地域の中で起きていたと知っていることと同じように、必然的におきたことであった。

同じような形の組織というものが、その階級わけがこれほどはっきりしていたというわけではないが、ダコタ族、アシニボア族、シャイアン族、クロー族、ボウニー族、そして、アリカラ族のなかに漠然とした形で存在していた。また、厳密な宗教的序列の友愛共同体と重なっていた南部スー族や、サルシ族とか、ウィンド・リバー・ショショネ族のような辺境部族の間にも、こうした組織がずっと緩やかな感じで存在していた。平原に住んでいたクリー族は、それぞれの集団が、勇敢な若い男を招き入れた、たった一人の戦士の組織を持つという形でかなりはっきりしたものを持っていたが、それは、他の集団、もしくは、よそ者から、新しい踊りを買ったのかも知れない。もし、彼らが、彼ら自身の持っている古い踊りを、もっと若い男達のグループに売り渡したようなときには、その戦士たちは、マンダン族のもっているような形のものを始めたかも知れないが、このようなことは実際には起こらなかった。それは一つの組織が、その組織の象徴となる印と、そして、宗教的な特権を併せ持っていたからである。

はっきりと序列の定まっていない典型的なものは、クロー族やシャイアン族の間に存在していた。仲間の資格は、自由意志によっており、年には関係がなかったが、特定の組織では、名目上は同等ではあったが、特定の期間は、他のしきたりと重複するような形で存在していた。クロー族のなかでは、**Lumpsoods** グループと **Foxes** グループ、そして、シャイアン族では、**Dogs** グループが、ある時代には、目だって重要な位置にあった。年齢—体系が、組織同士の間の対立関係というものをかなり排除していたが、対等の力関係として位置付けされたところに、これらは、はめ込めることができたし、また、実際にそうされていた。こうして、**Lumpwoods** のグループとか、**Foxes** のグループは、ともに、毎年、お互いに、的に対して最初の一矢を報いて、相手を凌ごうとしていた。そして、同じようなライバル意識は、ダコタ族のなかの組織の間でも見られた。

格付けされている、いないにかかわらず、そうした戦闘的な組織の機能を見てみると、われわれは、その私的、ならびに、公の機能というものははっきりと見出すことができるだろう。個人的なこの組織は小さな集団であったので、彼は、その小屋で、仲間達と睡眠をとり、食べ、踊り、歌を歌い、ぶらぶらし、大体は、楽しい時を過ごしていた。しかし、また、そこには、その一連の体系の中の特別な組織、もしくは、その組織全体、或いは、次々に別の組織、のいずれかに、権利を譲り渡していくという公に課せられた重要な使命もあった。こうした責務の中で一番重要であったのは、狩をしにいくときとか、部族の境界地域、そして、サン・ダンスのときなど、きわめて重要な事態のときに、治安の維持をすることであった。毎年、春には、クロー族の酋長は、それらの組織のなかの一つのグループに、秋になって、部族がばらばらに行動するようになるまで、治安の維持するように支持していたが(114 ページ参照)、マンダン族の場合には、この仕事は、何時も、**Black Mouths** のグループが担っていた。さらに、別名が“戦闘集団”を暗示しているようなものは、その組織の重要な役割は、その地域の特徴として、戦闘に果敢に挑む精神を育むことであった。歌は、何時も重要な役割をもっていたが、これは、常に、精神にある種の圧力をかけていた。こうして、オガラーラ・ダコタ族の **Kit-fox** グループのものは、次のような歌を歌っていたのであろう。

おれは、**Fox** グループの 1 人だ
いつでも死ぬ覚悟ができている
どんなに手ごわくたって
どんな危なくたって
それをやるのがこのおれだ

しかし、だれもが勇敢であったと思われるが、ほとんどの組織では、取り仕切る人として、2・3 人の特別に勇ましい男、彼らは、故意に危険をあざ笑うような振る舞いをし、良く目立つ服装をしていたのだが、を選んでいた。こうして、先述したようなオガラーラ部族の組織の中の特別に認められた身分の戦士は、**kit-fox** の皮のネックレス、**kit-fox** のあごの骨を使った飾りのついたヘアバンドを身にまとい、そして、頭の後ろには、カラスの尻

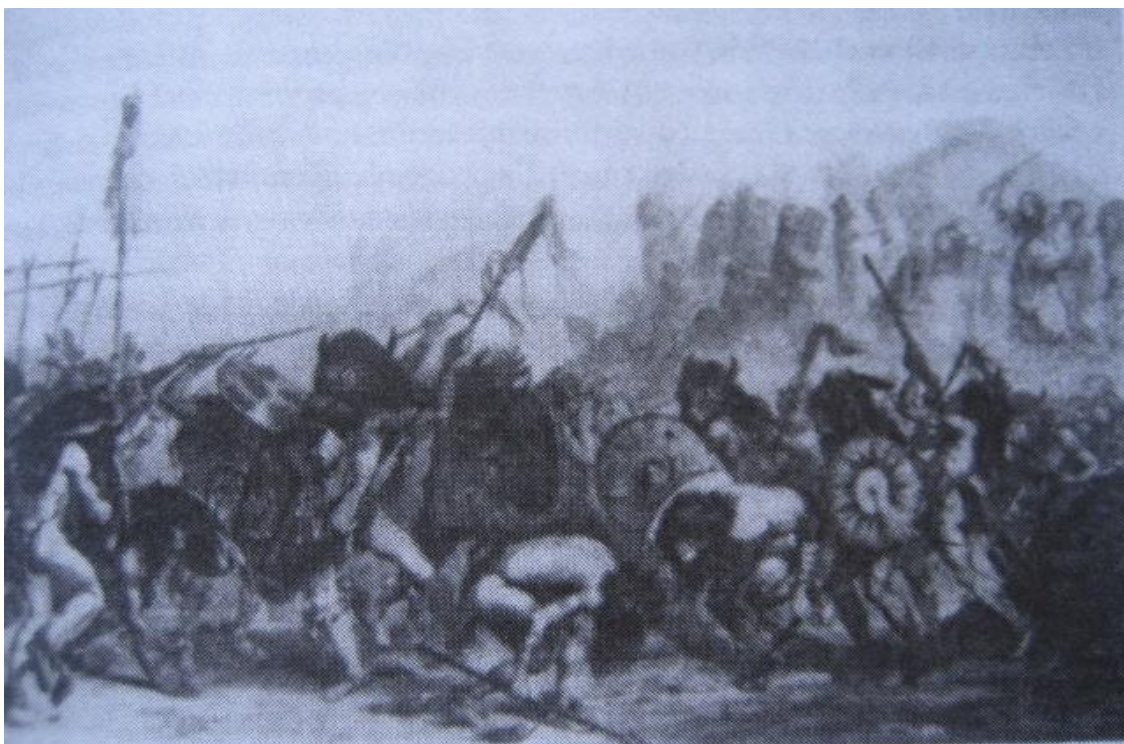
尾の羽と二つの特別なワシの羽根のついた房下がりをつけていた。しかし、こうした指導的な戦闘員達は、踊りを踊るときには、自分達の体を黄色に塗り、そして、やりを持った彼らのうちの 4 人は、戦闘の中では、先人を切り、決して、退却はしないという責務があった。真っ直ぐか、或いは、先のところで曲がっていた、こうした槍は、マンダン族の中の **Half-shaved Head** という組織のなか、そして、アラパホ族のなかの同じような組織の中で見られるなど、平原に住むインディアン達の間では、極普通の象徴的なものであった。(Fig. 30, 32, ならびに、65)

毎年、春に実施される戦闘集団の再編成では、他のそうした機会と同じように、彼らは、そとで、行列を組んで行進をしたり、ダンスを披露するなど、公衆にたいして余興をした。マキシミランの芸術家である **C. Bodmer** は、マンダン族の **Bull** グループによって演じられた相した壮観な情景を描いていた(Fig. 66)。階級と格付けは、角のついたバッファローの頭の一部を身につけているので良く分かるが、彼らは、決して敵の前では退却しないと宣誓した指導的な戦闘員は、目の部分だけをくりぬいた、バッファローの完全な頭蓋骨を被っていた。観客者たちは、アースロッジの屋根の上に座り、二人の踊り手がやるのと同じように、鉄砲を振り回したり、時には、発砲したりして楽しんでいた。



65. Mandan 族の頭を半分剃った男達の踊り Hidatsa. Carl Bodmer マキシミランの版画より

幾つかのこうした組織は、実質的には、厳密な意味で、何の宗教的な内容はもっていなかった；ただ、中には、宗教的な意味で厳しく義務化されているものもあった。ポウニー族やアラパホ族の組織では、多分、その冴えたるものであった。ポウニー族の組織の生



66. Mandan Bull 集団の踊り . Carl Bodmer マクシミランの版画より



67. 女達の踊り Mandan Buffalo Cow 集団の踊り . Carl Bodmer マクシミランの版画より

活は、ほとんどが、その秘密の集団の体系により縛られていた。そして、これを実施するために、彼らは、どんなところでも、ほとんどか、その大部分が秘密裡に、戦闘的なこと、組織のこと、そして、快楽的な行動などを覚える十くらいの組を取り入れていた。にもかかわらず、こうした束縛とは関係ないそのほかの沢山の組織が、宗教的な基盤を持っていた。それは、その基盤のなかで、その組織を支え人たちが、超能力的な靈感から新しい組織を発足させようと拘束力を分割していたのである。

戦闘集団とか、そのほかの組織などで見られた行動の基本的な部分として見られた、実を見張るような姿は、それが何を意味していようととも反対を唱え、求められているものと反対のことをし、そして、一般的には、常識とは逆の行動をとらなければならないという義務である。その典型的なものが、オガラー族のヘイヨカ組織である。たとえば、Wissler は、こういつている。“彼らの最も壮観な芸当は、煮えたぎる湯のなかに腕をつけて、冷たいぜとお互いに叫びながら、お湯を掛け合うことである。”

ミズーリ川の上流地域に住んでいる部族は、女達の組織も幾つか持っており、その組織は、買い集めるとみなされていた、年齢を基盤とした組織の形態に似ていた。が、しかし、当然のことながら、戦闘的な機能や、保安機能などは持ち合わせていなかった。それらの組織のなかで、二つの高い格付けのものが、Goose と、White Buffalo Cow という組織で会った。Goose の組織に属する女は、トウモロコシの種を上手に育てるため、そして、バッファローの群れをおびき寄せるための儀式を受け持っていた。White Buffalo Cow の組織のものは、やはりバッファローをおびき寄せることから、この様に呼ばれていた。彼らは、軽騎兵のような服に、羽飾りのついた白子のバッファローの毛皮のヘッドレストを身にまとい、交互に片足を他の足よりも高く上げて、ゆらゆらと横に歩きながら、ポーズを取って踊っていた。（Fig 67）

戦闘行為

平原のインディアン達の戦闘は、文明化された人々のやり方と比較すると、独特のやり方があった。長引く戦闘に、常備している軍、そして、永久資格を持った指導的な闘士達は、十分ではなかった。戦闘の目的は、必ずしも領土を確保しようというものではなかった。復習とか、馬を奪うとか、榮譽を勝ち得るといったようなことが主な動機で、逃げた馬の泥棒が、その馬の追跡者を殺すこともあったし、復習の襲撃は、付随的に馬を取り上げるということで終わっていたし、名誉と言うものが、どんな形であれ遠征をするということを得られていたので、直ぐに仲直りをしていた。部族としての主要な軍事力が、お互いに対抗させられるということが起きたけれども、これは、実際には、大体が、わずかに2・3人の戦士だけの軍事的な偵察のようなものだった。戦闘集団が誰一人の被害もなく帰還するというのは、最も名誉あることだと考えられていた；戦略の完遂のために意地で損失をするようなことは、インディアン達の考え方としては、全く、愚の骨頂であった。

われわれの感覚からすると、まさに違和感があるのは、戦闘と超自然信仰とが、一

緒になっていたことである。ダコタ族が使っていた盾は、その象徴的なデザインと装飾品により防御の力を備えていた。悪い前兆があると、それだけで、彼らはアッサリと襲撃しようと思いを固めてしまった。ただ、超自然的な信仰によりもたらされたひらめきがあったようなときには、それが、クロー族のインディアン達を戦闘に駆り立てていた：夢とか、或いは、靈感の中に現れた精神が、自分達の集団がどこに行けばよいのかを示していたのであろう：どこだけ沢山の馬を連れて行けばよいのか；尻尾の切られた、褒章として与えられた馬には、ジグザグの線が書かれていて、親指の爪のないシャイアンのインディアンの乗り物として使われていたものであろう。こうした超自然的信仰の拘束力のために、指導者達は、完全に部族をコントロールすることができたし、また、理屈の上でも、行進する道筋を決めることができた。実際に、彼は、その部族の倫理感に従い、その権力を彼の同胞と共有していた；その一方で、彼は、次の冒険を迫及していない自分に気付いていたのだ。指導者として何度も成功した実績のあるものは、彼に戦闘についての祈祷の能力があるとして名声を与えられたので、未熟な者達は、かれに、自分達にもその能力のひとつかけらでも分けてくれるように、その祈りのなかに自分も入る資格があるようにと、嘆願したのであろう。そして、かれに、そのご利益に対して大変な対価を払っていたのである。

インディアン達は、敵を殺傷するために組織化された集団と馬を捕まえる集団とをはっきりと分けており、歴史のなかでは、後者のほうが、ずっと日常的な出来事であった。一般的には、襲撃の戦士になろうとするものは、徒歩から始まり、時には、犬に運ばせて、沢山のモカシンをまとっていた；そして、彼らは、盗んだ馬をつれて凱旋することを望んでいた。役に立つ四足動物が、その飼い主のテントの食いつながれていたのだろうが、その動物を逃がそうと、敵意を持ってそのキャンプに忍び込むことは、明らかに危険なことであった；それゆえに、ある部族では、こうした行為をやり遂げることに特別な褒美をつけていた。

酋長達は、必ずしもそうした遠征を、何時も支持していたわけではなかった。多分、彼らは、警備担当のものに、自分達の土地の安全を確保するように命令をしていたのだろう。従って、主催者と彼の親友は、夜に抜け出して、それに志願者達が次々に加わって行ったものと思われる。こうしたやり方のいろいろなものが、この領域に広く行き渡っていた。指導者は、思うに、突然の襲撃で相手を麻痺させるような、或いは、襲撃の追い討ちに躊躇するような天気と呼び起こすような呪術をしていた。狼の毛皮をもち、彼らが報告のために部族のところに近づいてきたときには、遠吠えをしていた斥候たちは、彼らの報告が真実であることを象徴するために、バッファローの糞の山を蹴飛ばしていた。グループ全体のものが、部族の元に返ってくると彼らは、遠くのほうから、彼らがどの程度うまく行ったのかを知らせるために、コードに従って毛布を振り、合図を送っていた。任務が首尾よく行ったときには、彼らは、着飾り、そして、顔を黒く塗り、頭皮や戦利品を誇示しながら、キャンプの回りを行進して歩いた（Fig. 68）。頭皮は、棒の先に付けられ、そ

して、女の踊り手たちが太古の音や、歌に合わせて、それを持ち歩いていた(Fig. 69)。

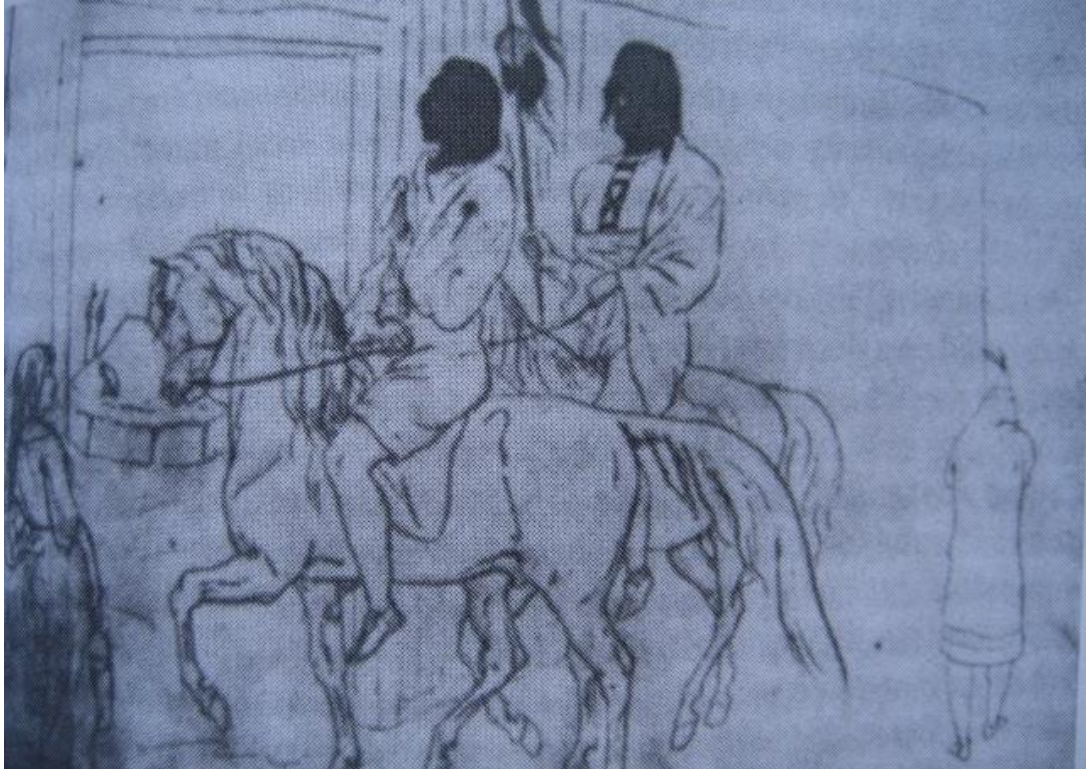
捕虜達は、部族に同和されていったと思われるが、場合によっては、あざけりを受け、虐待をされたり、或いは、拷問を受けたりしていた。また、特殊なケースとして、略奪されてきた女と結婚するということがあった。

要塞という言葉が、居住地を守ることと、馬泥棒を追跡をかわすためのものという両方のために使われた。ミズーリ川の上流域に住んでいた村人達は、諮るのが難しいくらい高い、柵を築いていた。そして、囲いには、銃眼を取り付け、村の中には、溝を掘っていた。(page 29) およそ、一世紀前のポンカ族の、沢山のアースロッジを守っている要塞には 6 フィートもの高さの、盛土の土手があった。後ろが谷になったような崖に位置していたものは、一方の方向からだけそこに入ることができ、そして、谷に沿って 200 ヤード以上も歩いてゆかなければならなかった。おおよそ、こうした砦と同時代のものは、オマハ族が、ダコタ族やポンカ族に予想されるような襲撃から学びとったものと思われるが、彼らのキャンプの周りに建築していたように、4 フィートくらいの高さのものであった。盛土された土手は、その上の部分には、できるだけティピーの覆いで覆われた、交錯したティピーの柱を立てる穴が開いていた。カバーしたティピーの覆いには銃眼が開けられていた。そして、深い溝が女や子供達のために掘られていた。

子供のころから、平原に住むインディアン少年たちは、勇敢なことが優秀さの道であり、年寄りや、悪魔で、また、戦闘で若くして死ぬことはとても素晴らしいことだといひ聞かれていた。彼は、有名な戦士が、彼らの手柄について公衆の前で話をしたり、演技をしたりするのを聞き、見ていたのであろう。かれをそうした戦士を、手に入れた物的な報酬とおなじように、名誉のある人だと思っていたし、それが、非常に勇敢な男が、指導者になるつもりのもに、彼の呪術の支度をさせるように、或いは、彼が、新しく生まれた子供に名前をつけ、そして、彼の指導者のために雇われたときのように、名誉あることだと思っていた。このように、すべての少年達は、著名な戦士の例を見習うようにてしつけられていた。

ここで述べたようなことにあわせて、支持者のいないような指導者でも、他の点では申し分ないものの他のものから尊敬されることにしきじったものよりも、より高く格付けされていた。この点を重要視すれば、なぜ、体の小さなものが、そして、独り者で意志の固い勇者が、ばかげた中途半端なところで、力を行使することを止めたのか、クリー族が、銃の普及した後には、相手に復讐をすることをあきらめたのかということが説明つく。

頭皮をはがすということは日常一般的に行われていたが、しかし、その精神においては、ある部族では違いがあった。南東部の文化圏のなかでは、頭皮を確保することが、基本的な目的であったから、クリーク族などは、少なくとも、七つの頭皮を持っていないものはだれ 1 人居なかった。しかし、そうした一方的な見方は、テトン族とか、クリー族と違ったわずかの部族だけが、頭皮をはがすことの意味を重要視していたような平原に住んでいた部族の間では、欠けていた。“あなた方は、クロー族が、彼の頭皮の手柄を誇らしげ



68 手柄の功績の象徴、この場合は、頭皮と、顔を黒く塗った戦士 Courtesy of Bureau of American Ethnology, Smithsonian Institution.



69. 頭皮の踊り Assiniboin 族 Courtesy of Bureau of American Ethnology, Smithsonian Institution.

に話すことは聞くことは決してないでしょう”、と言われていたし；ブラックフード族は、彼らの手に入れた沢山の馬とか、鉄砲に固執していた；そして、どこでも、ほとんど例外はなかったが、“大手柄”と言うのは、手柄の功績としての頭皮を剥ぐことを非常に見下していた。

時々、すべての認められた戦闘での手柄にそれとなく当てはめられていたが、大手柄（フランス語で、手柄は、花が咲くという意味）と言う意味は、正確には、素手で、或いは、シャイアンの場合には、床屋の柱のような線の入った特別の棒で敵の体に障ることであった。同じ敵に対しては、シャイアン族は、三人の男が、“手柄として数える”ことが認められていた。そして、最初に触った男が、より序列の高い榮譽を得ていた；クロー族とか、アシニボア族、そして、アラパホ族の場合には、手柄の程度はだんだん下がるが、4人までが手柄として数えることが許されていた。ほとんどどこでも、こうした手柄は、明らかに、人を殺すということより重要なものとされていた。“敵を殺すということは、彼の人が、触られるか、或いは、打ちのめされるかする以外は、何の手柄にも数えられなかった。”（アシニボア族）遠くから敵を殺し、そして、手柄を立てようと競いをし、部族のほかのものに追い越されたり、出鼻をくじかれたものは、二番目の榮譽に甘んじなければならなかった

先に述べたように、部族同士の間では、公の物語、そして、俺らの相対的な手柄についても同じであるが、それを利用する価値は異なっていた。クロー族の場合には、彼らは、その手柄というものを、その利用価値から四つのカテゴリーに分けて、体系付けていた：パイプを保持すること、たとえば、うまくいった集団を指導すること；本物の手柄；見張られている馬を盗んでくること；そして、弓（或いは、銃）を、手で取り合いしてひったくってくることであった。“酋長”として格付けを得るために、たとえば、目立つ手柄を立てた戦士は、その信頼を獲得するために、それぞれの種類の手柄を、少なくとも一つづつもっていなければならなかった。しかしながら、危うく死ぬところから、他のクロー族の者を助けるなどといった手柄のように、とりわけ高く格付けされていたが、ほとんど利用価値のない手柄もあった；そして、一連の格付けの低い手柄は、重要な立場に対して評価はされなかったけれども、手柄の証拠としては、語り伝えられていたのであろう。こうして、男は居なくなった馬を捕まえてきたこと、或いは、彼が、戦闘で傷ついたことなどを記録に残していた。アイオア族は、3つの格付けをしていた、一番高いものは、戦いで勝ったときの指導力；次は、敵を殺したこと、そして、一番低いものは、同程度の手柄として数えられていたが、頭を切り落とすこと、頭皮を剥ぐこと、そして、髪の毛の束を切り取ることなどであった。

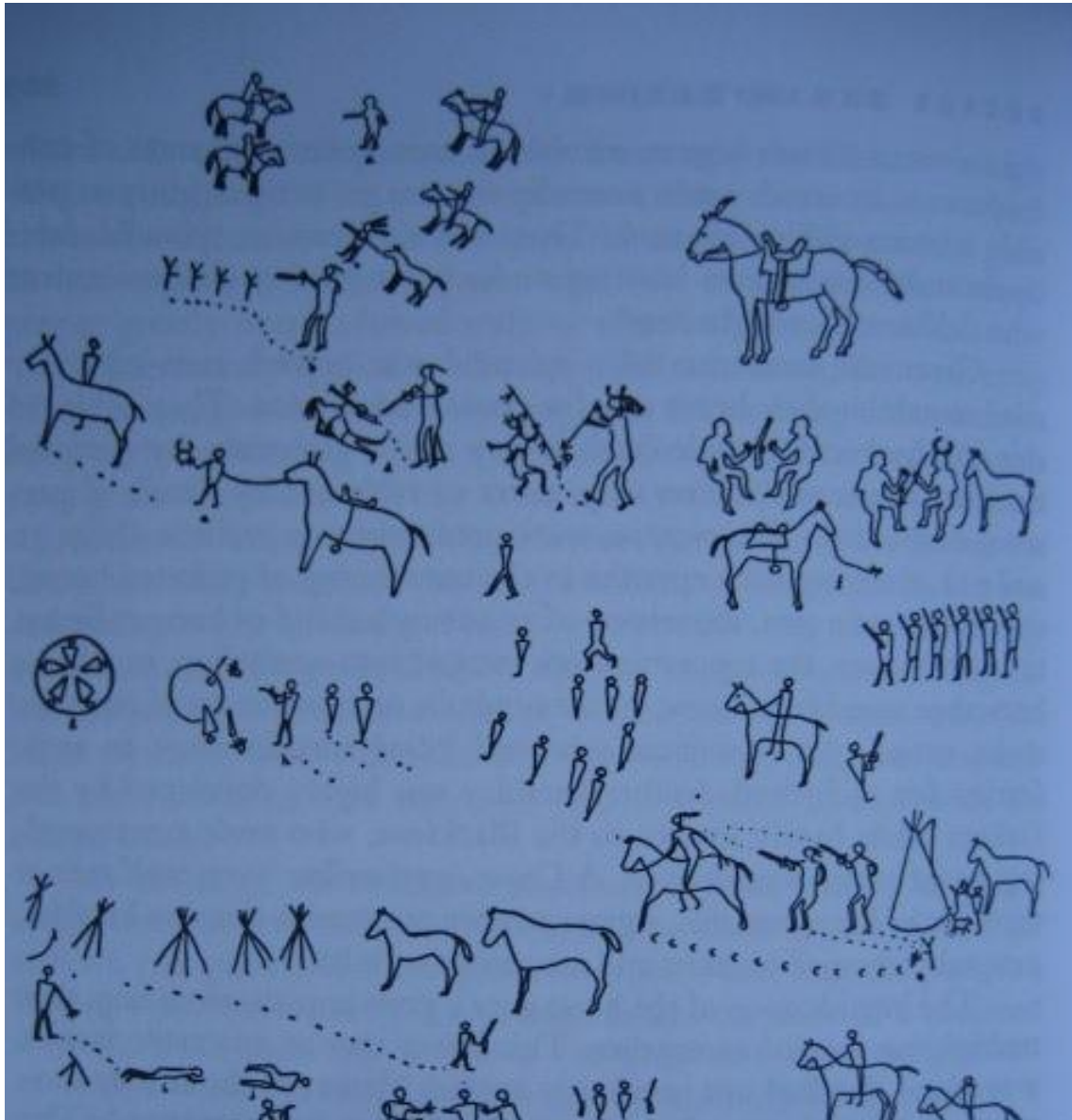
ある部族では、手柄のなかに、危険の要素と言うものに特に固執していた：わが身をさらけ出して敵を討ったものは、待ち伏せしていて敵を殺すことよりも上にランクされた；棍棒を使って敵を殺すことは、その男は、むしろ銃で敵をやっつけるものよりも価値があるとされていた。しかしながら、多くの部族は、女とか子供を殺すことも、戦争の手柄に

なるものとみなしていた。平原に住んでいたインディアン達の実際の感情は、部族の、死をも厭わない、そして、宇宙の人間は、生き返ることを熱望するという考え方の結果であった。その結果、いろいろな矛盾が起こった：人間は、必然的に、わが身の危険も省みず、できるだけ沢山の榮譽を手にしようと試みた。もちろん、そこには、突発的な向こう見ずの人や、或いは、自ら死を考えて長柄、苦悩や幻滅を感じながら働いているような人間もいた。

輝かしい戦闘の記録の賞賛を与えられて、男達は、大衆に認めてもらうために、彼らの勇敢さを示すような行動を率先しておこなった。彼らはこうした行動を、彼らの手柄が大事な収集物のいずれかに物語として記録されたり、その手柄の代表的なものがティピーや記録用の毛皮の上に描かれたり、あるいは、個人的な飾りの中に詳しく記録されるまで、続けた。こうした絵は、非常に写實的に描かれており、監視されている馬の綱を解くような出来事、銃を奪ってくる、敵の盾や戦闘帽を奪い取ってくるなどを描いていた。(Fig. 70, 71) しかし、なかには、代表的な出来事を一緒にして、象徴的に描いているものもあった。たとえば、馬のために蹄鉄を取り付けるとかといったような時などである。衣装の象徴的な飾りのなかで、様式は変化していた。敵を殺したアシニボア族の人間は、それぞれの手柄ごとにワシの羽根を飾りにつけていた；羽の図案は、ダコタ族では非常に洗練されていたが、ブラックフット族の場合には、それは稀に見る程度であった。彼らは、それと同じような目的で、白イタチの毛皮を使っていたのである。クロー族で手柄を立てたものは、彼のモカシンのかかととところに、狼の尻尾をまとっていた。銃を掠め取ってきたものは、敵の毛皮を彼のシャツの上につけていたし、指導者たちは、髪の毛で、シャツや、モカシンを飾っていた。

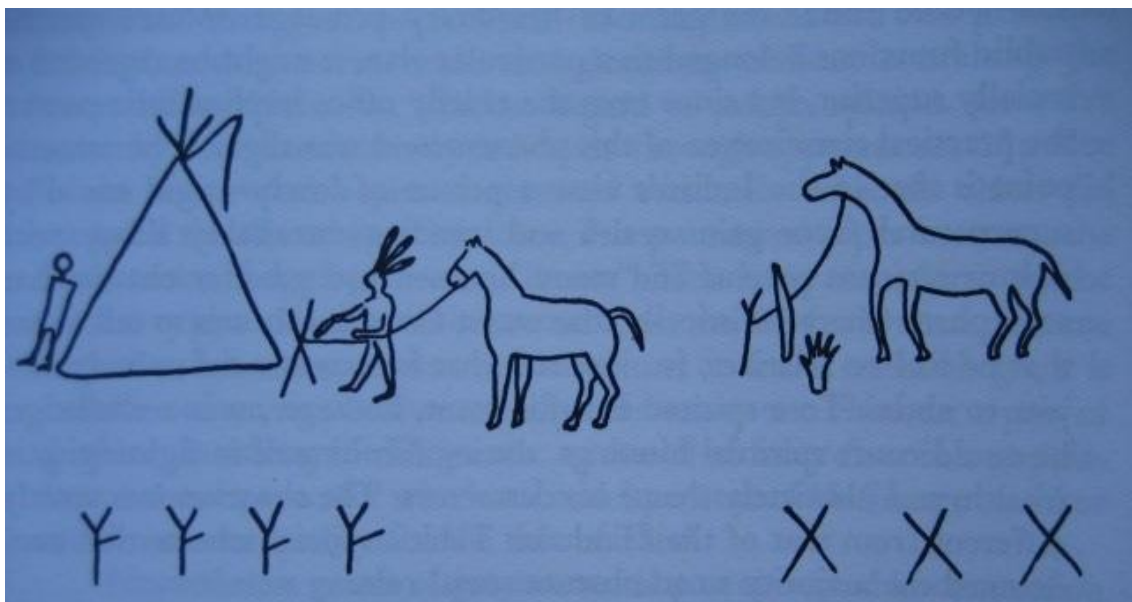
馬の導入が、襲撃をすることと物質的な活動の多様化に非常に大きな弾みを与えた。このことは、経済的な動機か、それまで存在していなかったものに付け加えられた。しかしながら、この現象の厳密な経済的局面は大げさに取り扱うべきではない。平原に住んでいたインディアン達は、彼らの物質的な欲望を満たすために、いうなれば、100 匹の馬の群れを求めているわけではない。ほんのわずかの運搬用の動物とわずかの乗り回し、狩をするため馬さえあれば、彼らのこうした目的は十分に達成されていたのである。モンゴル族とかキルギス族などとは異なり、彼らは、馬の乳を搾ったり、或いは、馬の肉を食料とするようなことはしなかったので、限られた数以上のものを持つということは、ちょうど、アフリカの王様が数百人もの妻を持っているように、たんに、社会的な見せびらかしのためのものでしかなかった。クリー族の襲撃は、その戦利品からの利益を得ようというを目的とするようなものではなかった。というのも、もし、彼が、10 匹の馬を確保したのなら、部族の慣例に従うなら、彼は、その 1 匹か 2 匹を彼の親戚か友達に上げ、それ以外はすべて放棄するということになっていたからである。

馬に対する固執が、平原に住んでいたインディアンの部族の戦闘好みという考え方に對する表れであるとするのは、明らかに間違いである。名譽に對する切望に押しつぶされ



70. ティピーの覆いの上に描かれた戦闘の状況 Blackfoot: a, Bear 酋長が歩いて、Assiniboi 族のインディアンから逃げている ; b, Double-runner と言う男が、馬綱を切って逃がしている ; c, 彼は、Gros Ventre の少年を捕まえている ; d, 彼はその手下が二人の Gros Ventre 族を殺している ; e, Gros Ventre に落とされた戦闘用の帽子を、手柄を数えながら、拾い上げている ; f, Crow 族から鉄砲をせしめている ; g, 五人の Flathead 族を殺した ; h, Cree 族がある森で避難所を占領したが、Big-nose 蛾、彼の前に立ちはだかった ; i, Cree 族の男がインディアンを殺したが、馬は逃げてしまった ; j, Double-runner が占いのパイプと、弓を Gros Ventre 族から取り上げ、彼を殺した ; k, 彼は、Crow 族から盾と馬を奪った。そして、追跡された ; m, 彼は二人の Gros Ventre 族を殺し、二丁の鉄砲を手に入れた ; n, 彼は、Gros Ventre の女と子供を略奪して来た ; o, 彼は、四匹のミュールをつれてきた

ているという現象からは離れて、正確に言うと、榮譽に対する執着というのが、東南や、西部の地域、たとえば、歴史的に有名な平原に住むインディアンの大多数はその地域から、その後の住居地に移動したのであるが、その地域の部族の気持ちを刺激していたことは明らかである。クリーク同盟のインディアンに関する、J.R.Swanton の報告書のなかで、彼は、次のように述べている。南東部の地域の戦闘は、“社会的なしきたりであり、戦闘での手柄は、社会的な出世のために必要な手段であった。”；その動機は、略奪することであり、頭皮をはがすというものではなかった。さらに、もっと目的についていうなら、それは、コーカサスと接触があったというある古い時代のウィスコンシンやイリノイの地域に住んでいたインディアン達について知っていることなのである。1615 年から、1760 年にかけてのこの地域に関する W.Vernon Kintz の研究によれば、“インディアン達[マイアミ族]の戦闘は、まずは、それに参加するものたちの名誉のための戦いであった。領地を手に入れるということは、動機ではなく、頭皮とか武勇の印を手にするということが目的であった。そして、戦士たちの技能と言うのが、彼らに取っては非常に大事だったのである。”そして、Paul Radin の研究が、ウィネバゴ族、言語学的には、この部族はスー族の一派であるオマハ族に非常に近いものがあるが、彼らは、平原に住んでいたインディアン達の軍事的な考え方と基本的に非常に似たものを持っていた：“男は、二つの理由から戦場に行き続けるのだ：“殺された自分の身内の復讐か、或いは、一般的には、彼は、十分な力を授かったと考え、そして、名誉を手にしたと願っての理由から”である。この部族は、手柄を賞賛し、そして、それを殺すこと以上に高く評価していた；羽のついた房飾りが敵をうち



のめした手柄を上げたもの、殺したもの、そして、頭皮をはいだものに与えられた。一方、そのほかの飾り物は、慣習で認められたそのほかの手柄のあったことを表していた；指導的な立場にあるものは、精神的な支持を求められ、後継者の死に対しての責任も持たされていた。（このことはイリノイ族についても同じであった。）；息子達は、“戦闘で死ぬことがいいことだ。”と聞かされていた；戦士は、戦闘に行くときには、彼の仲間と一緒に行くものと考えられていた；自分の軍事的な覚悟の真実性を証明するために宣誓された誓い、そして、その偽証は、死でもって償われた。Antoine Denis Raudot のメモから引用した、Kinietz からも同様、われわれは、18 世紀になって直ぐに、イリノイ族が確かに、杖とか岩を使い手柄を数えて、自分達が手にすべき一定の権利を得ていたということを学んでいる。

別の表現をするなら、典型的な平原に住んでいたインディアン達には、戦闘に対する固定概念が、非騎馬民族としての文化の中に存在していた；そこでは、平原部族のなかのもののように、主な動機というのは、経済的なものではなかったのである。

階級、慣わし、ならびに、統治体系

北アメリカに住んでいた原住民の社会は、概して、民主主義であった。そして、全般的に見て、平原の住むインディアン達の間には、大体同じような形のものが普及していた。階級の区別が行われ板が、それは、世襲のものではなく、いうなれば、時々行われていた様であるが、“特権階級組織”は、社会的な流動性があったので、それは、全く不合理だったのである。そして、結婚がその人の階級により制限されるような慣習はなかった。こうした観点から言うことができることは、どこでもそうであるように、裕福な家庭の子供たちは、ある種の特権を甘受することができた。ロックフェラーやモーガン家の子息達は、浮浪児達よりも、偉大なビジネスマンとなるチャンスにより恵まれているように、クリー族の酋長の子供は、親のない子供よりも、簡単に勇者として迎えられたのである。こうした、世襲の利権を抑圧しようとする考え方は、南の地方に行くとかなり強いようであったが、全体的には、必ずしも、どこも同じというわけではなかった。ほとんどの部族が、“実態のない財産”に、非常に高い価値をつけていた、たとえば、われわれの特許権とか、著作権に相当するような非物質的な特権である。そして、大体が、そうした特権の所有者達は、それを自分達の子孫に遺贈しようとした。そして、世襲的な特権の根源を育てようという衝動に駆られていた。特別な公的機能がある特定の血液集団に与えられていたところでは、それは、おそらく、社会的な優位性として認められていたのであろうが、しかし、酋長の様な指導者さえも、力をほとんどもっていなかったのもので、この現象の実質的な重要性は、あまりなかった。基本的な天は、インディアンの方では、身分低い生まれの人は、超自然の加護により富と地位をすることができるというものであった；必然的に、裕福な、或いは、身分の高い家の子供は、そして、その親類の者達は、浮浪児達よりもずっと有利な立場にあったのだ。最もらしいのは、身分のクロー族の最も無礼な行為は、相手

に、彼は身内が誰もいないと告げることであった。と言うのも、それが、彼は、その組織の中に、ののしる相手が誰もいないということを意味していたからである。しかしながら、こうしたののしりを若い元気のよい若者に投げかけるというのは、彼には、精神的な恩恵を手にする挑戦となり、そして、戦いのなかで自分を目立たせることであり、富を得、そして、究極的には、彼を中傷した者に恥をかかせることに繋がっていたのだ。こうした状況は、ヒンズーとかタヒチの社会組織の中にあった、成人に対し、漠然とした組織の役割を宣告するようなものとは全く違っていた。

平原に住んでいたインディアン達とタヒチの人たちとの間の最も重要な違いは、物質的な財産にかかわるのもである。タヒチでは、王様は、部下の財産を着用することができたのに対し、平原に住んでいたインディアン達の間では、そのような行為は、考えもつかないことであった。これに対し、偉大なる男は、彼の地位を、貧乏なものに対して気前よく、寛大な振る舞いをすることで、最善の形で保つことができた。輝かしい戦闘の記録に続く、こうした現実的な行いが彼の高い立場を維持する基本であったのだ。オガララ族は、特に高い名声を甘受している酋長達の組織があった；しかし、新参者が入ることを許される時には、彼は、貧乏人、とりわけ、夫を亡くした女や浮浪児などの世話を懸命にしなければならなかった。ブラックフートの間では、どうしても指導者になりたいと思っていたものは、自分が貧乏になるほどの費用をかけても、それでも、首長の公然たる地位を得るために、多大の振る舞いをしたり、贈り物をして、競争相手よりもよく思われるように努めていた。オマハ族の社会的な組織についての研究のなかで、J.O.Dorsey は、オマハ族の場合には、賞賛に値する部族の男には二つのクラスがある、— “そういう人は、ことあるごとに貧乏な人に施しを与え、絶えず、振る舞いにお客を招待する人達である”、と、それに付け加え、“敵兵の何人かを殺し、沢山の馬を部族にもとに連れてくる人たち” であった。事実、格付けと言うのは、戦闘の指導者により認められた、沢山の軍事的な手柄に大きく依存していた。

これまでに述べたことから分かるように、平原に住んでいたインディアン達の“酋長”は、決してワンマンではなかった。そうした酋長は、実に、大西洋とか、ガルフの地域に実際に存在していたが、この地域では、例外的には、非常に強い個性というものが、大きな影響を及ぼすことができることはあったけれども、その呼び名は、名誉職のようなものであり、官職者としての権威と言う意味は殆どなかったので、居なかったのである。慣わしとして、酋長と言うのは、名ばかりのもので、部族のなかで訓練されたどんな力も、その人の戦闘での記録とか、寛大さによって社会的な高い地位が認められた、責任のある人達の人柄全体によって作り上げられていた。1880 年ころまで、オマハ族には、二人の主要な酋長がいたが、しかし、彼らは、より身分の低い名ばかりの酋長達に相談することなしに、たとえば、公の意見を無視したりすることなしに決して重大な決定をすることはなかった。強制的な意味を持つ権力というのは、狩での治安を維持することを支持されるといった間接的なものによってのみ、認められていた；部族のなかで諍いが起きたようなとき

には、酋長が、力によってその騒動を静めるといったことはしなかったが、けんかをしているものに神聖なるパイプを渡し、“なんとか喧嘩をやめるようになだめていた。” こうしたことが、この地域では頻繁に行われていたようである；普段は、酋長は、特に偉い人であったというわけではなく、平和を維持し、単なる代表者というだけであった。基本的に
行われていたことに関する限り、酋長が 1 人なのか、それとも、何人かが組みになっているかと言うのは対して重要なことではなかった。シャイアン族の間では、人口が大体 4,000 人くらいいたが、その中に、44 人からなる協議会があり、彼らは、その家系の良さで、酋長としてそれまで認められることができたかどうかということはどうでもよかった。

にもかかわらず、統治的な力の根源が特別な機会と結びついて存在していた。とりわけ、全体が集まって狩をするときとか、主要なお祭りごとのときには、治安を維持する力が、強制的な権威を発動していた。通常は、より偉大な酋長は、部族の中の取るに足りないものにはあえて彼の手を差し伸べるようなことはしなかったが、彼により指名された治安維持に携わるもの、或いは、お祭りなどでは、聖職者(page 163) により指名されたものが、手に負えないような輩達の取り押さえを行使していた。とりわけ、バッファローの大掛かりな狩に行くときには、全体のものが不利を招かないように指導者たちの指示に注意深く服従することが必要であった；こうして、治安を維持する者が、誰もが自分だけで、そして、人を出しぬいて、狩をしないように指示を出すようにしていた。シャイアン族の治安を維持するものは、別の部族のそうした人達よりももっと寛大であったが、それでも、たとえ傑出した攻撃手であったにしても、彼を叱ることがあった；オマハ族の間でも、非常に高く評価されているものが、ひとたび、激しく非難されるようなことになれば、彼は、決して、それを回復することができなかった。どこの部族でも、こうした罪を犯したもののティピーは、破壊され、そして、彼の持ち物は、すべて没収される羽目にあった；極端な場合、もし彼がこれに抵抗するようなことがあれば、彼は、おそらく殺されたのであろう。

しかしながら、そうした厳格な統治の根源と言うものは、平原に住んでいたインディアン達の気持ち が作用していたし、また、一年のうちの大半をそれぞれの有力な部族に分かれて生活したかったので、決して永久的な少数独裁政治や君主政治になるようなことはなかった。

にもかかわらず、治安的な権力からは離れていても、そこには、今のわれわれの感覚という裁判のようなものではないが、一定の法的な概念があった。時には、宗教的な考え方が、好ましからざる行為に対して取り扱いに影響を及ぼしていた。こうして、シャイアン族では、部族のなかの殺人者にたいしては、罪と罰を与えていた；神聖とされていた矢を汚した場合には、それは、神聖なものの中でも特に神聖なものであったので、44 人の協議会の決定に従い、おそらく、10 年間の部族外への追放を求められた。しかし、クロー族の場合には、非常に痛ましいことではあったが、彼らが属していた血縁関係の集団の間の確執を生む原因となるので、殺人はただ単なる世俗的な悪行であるとみなされた。村の酋

長や治安を維持するものは、殺人を犯したものの血族のものに、被害を受けた側の家族に対して物質的賠償をさせるようにするなどして、両方のグループに対して、罰を与えるような役割ではなく、なだめる役割をし、和解をするように努めていた。

クロー族とか、シャイアン族では、宣誓とか、厳しい試練というものを負わされていた。もし、1人のクロー族の男が、非常に価値のある戦闘での手柄に対して別の人間がつけた文句とやりあうなら、その両方の対立者は、ナイフを持って、それを太陽にかざし、そして、もし彼が真実を語らないような場合には、残念ながら、そのときには自分自身を強打すると神に誓うのであった。そして、もし、その係争の当事者のどちらかが、そのあと、直ぐに、苦しんでなくなったり、或いは、災難で苦しむようなことが起こったら、彼は、偽証者とみなされたのであった。

非難されるような行動から防ぐ効果が、公の意見の強大な力のなかにあった。インディアン達は、とりわけ、社会的な地位に影響を及ぼすような噂話に敏感であった。Clark Wisslerによれば、ブラックフット族では、人に迷惑をかけるような男は、“直ぐにあざけりの的となり、みんなから大笑いされるようになった。”そして、犠牲者の償いとして、彼は、部族外の追放を受けるか、戦闘の場に送られたのだ。クロー族とかヒダツサ族の場合には、この種の命令の実行を訓練するために、はっきりとした関係が持っていた。それは、自分達の父親がともに同じ血縁関係の一族である両方の性のもの同士の間が存在していた。こうした、“冗談のような親族達”は、お互いにあたかも、血のつながり、或いは、結婚による確かな真実の親類であるかのような、悪ふざけをしていた。(page 82)しかし、と同時に、彼らは、お互いに好ましい振る舞いから逸脱するようなことを咎める社会的な厳しい責務を担っていた。こうして、男は、臆病者としてさらし者になったり、あざけりを受けたような場合には、まるで、恥とともに大地の底に落ちていくような思いをしていたのであろう。

取引； その経済的な価値

とりわけ局地的なグループのなかでは、取引というものは殆どなかった。それは、生活の必需品は、自由に共有していたし、また、どこにでも伝わっているような技術は、自分の仕事に排他的に専念している専門家には使われてはいなかったからである。にもかかわらず、ある人たちは、弓作りとか、矢の製造、そして、服を作ることに卓越していた。そして、そうした人たちは、規則として、彼らの持っている技術を血縁関係にない部族から来た自分の伴侶にさえ、理由もなしに教えようとはしなかった。もし、彼らのうちの1人が、彼の技量をよそ者の好きなようにみせるなら、その恩恵をこうむるものは、何がしかの代価が期待されているものと理解した。優れた矢の製作者は、少なくとも、有望な顧客から、適当な接待を受けていたようであった。馬術を使う生活の発展に伴い、馬が価値を図るのに適当な単位となった；クロー族の間では、はじめのころは、よい矢がその役割を

提供していたように思われ、その 10 本が、一匹の馬と同等な価値があると数えられていた。

相互の責任と言うものが認められていたけれども、利他主義的な振る舞いというものがある状況のもとでは、課せられていた。ブラックフット族や、クロー族では、たまたま、仲間の部族の屠殺人と出くわしたときには、間違いなく十分な肉を手に入れることができた。どんな、自尊心の強い人間でも、貧乏な人には者を分け与え、寛大に振舞うという彼の仲間の考えにふさわしい生き方をすることにしくじるような首長の地位に上ることを望むものは誰も居なかった。(page 113)

公式の特権に付随していた経済的な考え方は、全く別のカテゴリーに属していた。この範疇に入っているものは何でも、今のわれわれからするなら、実に法外な価格が必要とされていました。宗教的な儀式のときに顔に簡単な図柄を塗るという権利でさえ、一匹の馬に相当するほどであった；そして、薬の包みの内容についてみると、人々は、それに、\$100 相当のものを支払わなければならなかったようだ。あるクロー族のものが、毛皮の毛布の代わりになるような、近代的な代替となる毛布を作る特権を手に入れたが、馬と言う単位で売り手側の頭の中に描かれていたのは、それは、\$62 の価格であった；加えて、買い手のものは、それに模様をつける図案の書き手を雇い、さらに、適当な羽飾りを買わなければならなかった。別のクロー族の男は、タバコの組織のなかでスポンサーになっている男に、馬 10 頭を支払っていたし、また、見習い中の親類の者は、さらに、23 頭の馬を支払いとして補充していた。さらには、よくあったことだが、非常に血筋の濃い親類の者であっても、特権をもつ買い手に、通常の支払いを免除することができなかった。こうして、ヒダツサ族の子供たちは、薬の束を保有している父親から、それを彼から購入する特権だけを相続していた。

どうして、人々は、われわれからすればあまり価値のないようにみえるそうした公式の特権に対する見返りとして価値のある資産を差し出そうとしたのだろうか？ブラックフットのデータを例にとれば、その包みを持っているということが、長生きと、成功と、幸福というものを確かなものにしてくれると考えられていたのではなかろうか；結果として、それが、社会的な威信をもたらしていたのである。その包みを買うということが、それが、容易に合意されたものであり、また、新しい買い手は少なくとも、ある時期に売り手から要求された価格を支払うという、世論の抑圧の下にいたことから、安全のための投資であったというわけである。このこととは別に、ある時期の所有者は、いつであっても、こうしたことに関係した儀式を推進する人たちが、彼に対して、その扱いに熟知しているということで、手助けをしてくれるように頼み、そのときには、彼は、代価と言う形で心づけを手にすることができた。“われわれと一緒に、若い男達は、貯金口座を開くことをしきりに勧められたが、ブラックフット族の間では、彼らは、この薬の包みの所有者になることを勧められていた。” (Wissler)

部族の中での取引は、必ずしも、インディアンと白人との間の取引と明確に分離することのできるものではなかった。クロー族を訪問したときには、インディアン達は、ミ

ズーリ川の上流地域で収穫されたトウモロコシと彼らの素晴らしい毛皮との物々交換をしていたように、疑いもなく、そこには、かなり沢山の原住民達の産物の交換が行われていた。さらに、南に下ると、それに相当するような現象が、1541年にコロラド族の間で観察されていた。しかし、歴史的にはっきりした時代に、ある地域的集団から、別の集団に渡っていた品物は、その殆どは、白人達の持ち込んだものであった。もっと広い目で見ると、馬が、スペインの植民地から入ってきて、(page 40) これか、南部の平原に普及していった。これに対し、銃(他の日用品など一緒に) は、主として、イギリスやフランスの手により、北の地方にもたらされた。このことが、シャイアンやカイオアークマンチが、1840年に友好的に出会ったときに、コマンチが馬の贈り物を拒んだのか、実は、彼らは、馬を沢山持っていたのである、そして、直ぐに彼らは彼らの持っていた余りの銃、毛布、ビーズ、サラサ、そして、金属製のヤカンなどを交換に差し出した、そのわけを説明している。明らかに、相互依存の形が掲載されたのであった：1820年ころになり、アラパホ族は、シャイアン族からイギリス人の持ち込んだ商品を手に入れるために、もっとも、それらは、マンダン族からシャイアン族が手に入れていたものであったが、そのための、“取引所の類”のものを平原の合流点で開いていたという報告がある。

白人達との取引の影響は、幾つかの接触がすでに報告されているように、かなりの奥地まで浸透していた。銃を手に入れることで、クリー族が、西に住んでいた周辺部族に入り込んでいくようになり、そして、彼らがウッドランド地域からもっと典型的な平原で生活する人々に戻る手助けとなっていった。まさに、間違いなく、インディアン達は、最初に、毛皮取引商人達により、富を手にするために動物の狩猟を行うということをそそのかされたのであった。こうして、彼らは、全般的に、新しい食料を、そして、刺激性のある食料 – それは、パンであり、砂糖であり、コービーであり、お酒などを食するようになっていった。金属性の用具が、それまでの、土器であるとか、木製のものにとって代わり、そして、火打石が、それまでの、ドリル形式よりも簡単に火をおこすことができるということがわかった。それまでの毛皮よりも簡単に縫製ができる布切れが作られ、金属製のナイフは、石のナイフよりずっと切れた。こうして、それまでの先住民族の文化と言うものが、だんだん廃れてゆき、ほんのわずかの断片的なものが、儀式的な機会のために残されるということになった。